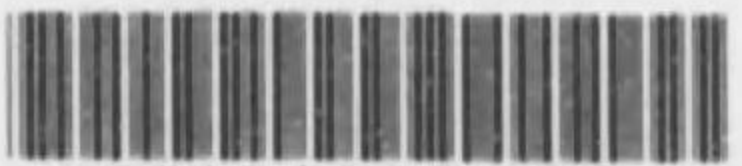


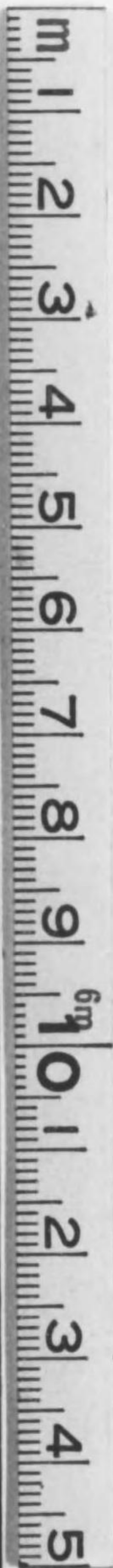
918.6-Me251ウ



1200500759267

918.6

251



始



49

918.6  
ME251



明治文學研究會編

岡子規



大都會書局版

Vertical handwritten text on the right page, likely bleed-through from the reverse side. The characters are difficult to decipher but appear to be in vertical columns.

730  
437

目次

正岡子規小傳……………一

四季の女—小説、隨筆、紀行、新體詩……………七

筆(新體詩)(二七) わがもの美し(三〇) 旅に見し十六娘(三二) 八百屋お七の心境(三三) 海に  
浴る少女(三五) 胡蘿蔔と女(三六) 女四十にして淺草を知らず(三七) 池畔の少女(小説)(三九)  
心に描く女(小説)(三三) 曼珠沙華縛る少女(小説)(三三) 蛇使の娘(小説)(四六) 花賣娘(小  
説)(五二) 元祿の四排女(五三) 加賀の千代(五五)

をみなを詠める—和歌十六首……………五

季節のをんな—女を詠める俳句……………三

心の日記—隨想……………三

薔薇の苔ふくる(九三) 上野の花(九四) 向島の花(九五) 春の雨ふる(九六) 春淋し(九七) 人の  
 痛みは何とやら(九八) 夏のけはひ(九九) 言葉の塵(一〇〇) 希望つきる時(一〇一) 故郷は母の乳  
 房(一〇二) 鏡嶺如雨 (一〇三) 貧しきは(一〇四) 天地無情(一〇五) ある日街に出る(一〇六) 提燈  
 に月が照る景色(一〇七) 心おぼえ(一〇八) 夏の夜の音(一〇九) 秋の日の想ひ(一一〇) 苦痛の記  
 録(一一一)

旅 三 味 ..... 一一五

旅の古義(一二五) 秋風の旅(一二六) 青田の風の八百里(一二七) 舟中望明石城(一二八) 大陸へ渡る  
 (一二九) 日本が見える(一三〇) 總武めぐり(一三一) 紅葉を見んとて(一三二) 覆盆子林と牛の群  
 (一三三) 仰臥の旅愁(一三四) 島井峠の茱萸(一三五)

和歌といふもの ..... 一二四

歌よみに興ふる書(一二四) 三たび歌よみに興ふる書(一二四)

竹の里歌 ..... 一二九

新 體 詩 ..... 一五五

蜻蛉(一五五) 金州城(一五六) 獨體(一五七) 空村(一五七) 債金收容(一五七) 三陸海嘯(一五八) 皆既  
 日蝕(一五八) 軍艦派遣(一五九) 古城の月(一六〇)

文と繪と美と ..... 一六一

流行小説家(一六一) 古池の吟(一六二) 新しい假名文字(一六三) 微妙複雑なる人事(一六四) 近古  
 名流手蹟(一六五) 造化の妙(一六六) 外國の山水畫(一六七) 畫讀について (一七八) 畫の品性  
 (一七九) 俳畫の眞髓(一八〇) 寫生の味(一八一) 美に標準ありや(一八二) 西洋ずきの愚(一八三)  
 色彩を作る(一八四) くだものの色(一八五) 廣重の俗氣(一八六) 「感じの善い」ことに就て(一八七)  
 和服と洋服の辯(一八八)

俳 味 湧 く ..... 一七七

味つけの精神(一七七) 味噌汁(一七八) 愛の果實(一七九) 柿食へば(一八〇) 桑の實の味(一八一)

緋ノ蕉(一九五) 雲いろいろ(一九六) 住居をめぐる樹木(一九七)

俳人往來

一九九

燕村素描(一九九) 寶井其角(二〇〇) 鷄聲馬蹄—西行・宗祇・芭蕉—(二〇一) 一茶の俳句を評す(二〇九)

俳句といふもの—句作の指導標—

二二五

第一 俳句の標準(二二五) 第二 俳句と他の文學(二三七) 第三 俳句と四季(二三八) 第四 俳句を學ぶ心得(二三〇) 第五 俳句作りの掟(二三六) 第六 古句を解剖する(二三八) 第七 俳句の結構について(二三六) 第八 俳句のテーマ(二四二) 第九 俳句のまとめかた(二五〇) 附 俳句問答(二五三)

寒山落木(俳句)

二五九

明治十八年(二五九) 明治十九年(二五九) 明治二十年(二五九) 明治二十一年(二六〇) 明治二十二年

年(二六〇) 明治二十三年(二六〇) 明治二十四年(二六一) 明治二十五年(二六一) 明治二十六年(二六二) 明治二十七年(二六三) 明治二十八年(二七〇) 明治二十九年(二七二) 明治三十年(二七五) 明治三十一年(二七七) 明治三十二年(二七八) 明治三十三年(二八〇) 明治三十四年(二八二) 明治三十五年(二八四)

季節の巷

二八七

太平洋(二八七) 智仁勇(二八八) 日本の偉さ(二八八) 野心は大なるべし(二九二) 生活の垢(二九三) 喝采は永久ならず(二九三) 景色と歴史(二九六) 都鄙の子供(二九七) 哲學の發足(二九八) 大は小を兼ねるけれど(二九八) 言語と人氣、氣候(二九九) 楠公の銅像について(三〇〇) 飯炊會社作らばや(三〇一) 英雄と馬鹿(三〇三) 餘裕も何もなし(三〇四) 文明の極度(三〇四) 文學者の早熟早世(三〇五) 新聞の表情(三〇五) 職あり人を求む(三〇七) 可恐者(三〇八) 不平十則(三〇八) 人の世の調和(三〇九) 漱石寸話(三二〇) 生くるための手品(三二二)

正岡子規著作年表

三二五

編纂者の言葉

三三三

正岡子規

## 正岡子規小傳

### 俳聖子規出現前後

明治年間は、日本の歴史に大いなる轉機を醸成させた重要な時代であつた。制度文物百般が一新して、あるものは成長し、あるものは次の時代の胚種となつたのである。

文藝界に就ても同様で、一部には江戸末期の低俗な趣味思想が低回してはゐたが、新たな文陣の擡頭は情容捨もなく、舊文藝陣破壊の狼火を上げたのである。しかし、明治の初期には、未だ眞の思想・哲學と名づくべきものの發生は見なかつた。その頃は、朝野を擧げて維新以來の、國家や政治や社會の諸制度の建設整備に急であつたため、太平の娛樂物であり、寧ろ非常時には無用の長物視されてゐた文學・美術の方面には、誰も手が廻らなかつたと考

へられる。何よりも先づ、新舊文明の制度や物の入替が急務であつた。舊物破壊は、チヨン盤を散髪にしたり、帯刀を廢したりする風俗習慣上だけでなく、文學・美術・宗教・道德の無形のものにまで及んだのである。奈良の興福寺や芝の増上寺にある五重塔なども危く焼却されさうな運命にまで立到つた。随つて、古書・古畫・古美術類などで、明治維新の暴風によつて散逸消滅したものが、どれだけあつたかわからない。ともかく、この時代には想像以上に古きは葬られ、新しきは培養されたのである。

この嵐が一段落つくと、漸く、社會の眼は新文藝・新美術誕生に向けられて來た。と同時に、自由民權の思想が、潮のやうに大衆の間に流れこんだ。思想の發生は、一般の世人にも容易に理解させ得べき何等かの方法を必然に形づくる。政治小説、社會小説とも目さるべき小説が、先づ明治文藝界の初頭に君臨したのである。そして、勢ひ西洋研究は崇拜となり文藝・美術に、ポツポツ翻譯・翻案が移植されるやうになつた。

純粹な日本文學とも云ふべき俳諧が、芭蕉、蕪村以後、殆ど死んだやうに眠りつゞけてゐたのは不思議であるが、明治の新文藝が勃興しても、矢張り俳諧の新精神を把握する人は愚

か、その不自然な眠りを搖り起さうとするものの現はれなかつたのは、一層不可解な氣がする。尤も、眞の日本精神の發顯が、現代に於て一層華華しいことを思ふ時、西歐新文物の移入に大童になつてゐた明治初年に、たかが十七文字を基調とする俳諧が無視されてゐたのは、或は當然かも知れぬ。又、現代に於ては既に一つの頂點に達したとも云へる日本文學は、この時代に培養された西洋の純粹藝術によつて、物の見方、考へ方を教つた人々があつたればこそ、初めて自分の足下に横はる日本文學の破片に新しい生命を吹きこむことが出來、一層独自のスタイルと精神とを以て異常な進展を見たのだとも云へよう。

さて、文學とは何か、小説とは何か、といふ藝術の根本義に突當つた人人は、この疑問の解決に全力を擧げた。新しい機運は徴した。かくて、明治十八年、坪内逍遙の文學論「小説神髓」と小説「當世書生氣質」が慧星の如く、混沌たる文藝界に出現した。この二つの書物は混迷期にある日本文藝の新しい道を決定したのである。

だが、俳句の方は、未だ繼子であつた。寧ろ近代文學と一層密接に提携すべきである俳諧は、「文學」ではなかつたのである。存在してゐたとしても、それは文人の餘技とし、趣味



として、微かな生命を保つてゐるに過ぎなかつた。その當時は、文學の本家でもあつた俳諧を、畢生の仕事として、體當りを喰はせる程勇氣のある人も、情熱を抱く人も居なかつたのである。

俳句が、漸く世人に關心を有たれ、純文藝の地位を獲得したのは、正岡子規の「芭蕉雜談」(明治二十六年十一月—二十七年一月)が日本新聞に掲載されてからである。この一篇は、正に俳句の「小説神髓」とも稱さるべきであらう。埋れてゐた俳句に新しい生命が吹きこまれた記憶すべき記念碑である。

明治の俳聖として不朽の名を止める正岡子規は、こゝからあの高邁な意力をもつて根強い俳諧精神強化の行脚に出發したのである。しかし、これとても、「小説神髓」より十年遅れてゐる。結局、子規以前に子規の如き人は皆無であつたのである。

俳句は、日本の國民文學と謂はれる。たつた十七文字に假託して森羅萬象を再現する独特な文學形式である。しかも、これは單に讀むだけではない。誰にでも作れるところに、永遠の生命があり、魅力がある。

かくて、子規は新しき俳諧道樹立のために、舊套打破の大旗を翳し、既存の文藝界へ肉迫して行つた。と云つても、それは「芭蕉雜談」が、一つの契機となつただけで、新生俳諧の基礎は子規自身によつて最早十分備つてゐたのである。子規は、西歐の文藝にも通じ、古俳句、古文學、そしてその原理や變遷に對する造詣は、到底凡俗俳人達がその足許へも寄りつけない位深かつた。子規は、さうして、舊俳人たちの生活を否定し、今迄の俳人の作品は、單に古くさい理窟の堆積であると云ひ切つた。隨筆「天王寺畔の蝸牛廬」の中で子規は、逍遙の「小説神髓」を讀んで文學に對する一つの示唆を受けたことを書いてゐる。逍遙が、「小説神髓」の中で馬琴流の小説を排斥し寫實を強調してゐるやうに、子規も亦、眞の俳句は寫生によらなければならぬと俳句革新を力説したのである。道なき荒蕪地へ道をつけてゆくのであるから、この仕事は非常に困難であつた。勿論がういふ仕事は子規一人の手で成し遂げられるものではない。子規の周圍にあつて、弟子となり、友となり、或時は師ともなつた人の名を逸することは出来ない。その最も側近にあつた二三を擧げるだけでも、内藤鳴雪、高濱虚子、河東碧梧桐、五百木飄亭、柳原極堂、新海非風、寒川鼠骨、石井露月等々の諸氏

がある。この中、鼠骨、虚子、碧梧桐氏等は同郷の人である。又、夏目漱石、長塚節、阪井久良伎、佐藤紅緑、中村不折、佐藤肋骨、香取秀眞、寺田寅彦の諸氏等等、文學・美術、官界に活躍し、又現に活躍しつつある知名の士を擧げることができる。

子規は智の人であると共に、徳の人でもあつた。子規の名が、美しく、氣高く、今尙世人の胸に生生としてゐるのは、子規自身の力もさることながら、その周囲にあつた人人が皆一粒撰りの士であつたことも見逃せない。極堂氏は郷里松山に歸つて雑誌「ホトトギス」を發刊した。その後この雑誌は虚子によつて現在に及んでゐる。新傾向俳句で鳴らした碧梧桐も既に世に無いが、鼠骨、久良伎、不折等の諸氏は、それぞれの分野に活躍しつつある。中でも、我々の耳目に新たなのは、近衛文麿公に大命降下した昨年（昭和十二年）の初夏、新首相は、陰に陽に新日本誕生に與つて力あつた國士俳人飄亭五百木良三氏をその病床に見舞ひ、三十年の知己に酬ひたことである。飄亭は、晩年こそ俳句を作らなかつたが、子規に先立つて、新しい俳句道を拓りひらいた人であつた。惜しい哉、新首相が伊勢へ旅立つた三日目に飄亭は永遠の歸らぬ旅に出たのであつた。

今では

謹呈新首相

五月晴れの不二の如くにあらせられ

病床にて 飄亭

の一句が、子規の友として生残つてゐた日本派俳壇の雄たる飄亭に關聯して追憶されるニュース的事件の一駒になつてしまつた。

### 子規居士の藝術と生涯

子規は、死して明治俳壇に不朽の業績を残したが、その三十六年の短い生涯は、普通人の一生を幾倍にもした以上の努力の連続であつた。

子規正岡常規は、慶應三年九月十七日、伊豫國松山市新玉町に生れ、幼名を虎之助、通稱を升のぼと呼んだ。父は隼太、母は大原氏。六歳（明治五年）の時父を喪ひ、母方の大原家に預けられ翌七歳法隆寺内の寺小屋に通學、更に翌八歳にして松山市勝山小學校に入學した。か

くて、七八歳頃から、子規は外祖父大原觀山に漢學を學び、伯父佐伯半彌に就て習字を學んでゐる。この修學が、後年の子規を造る素地となつたことと思はれる。大原觀山他界した後には、土屋久明に素讀を學んでゐたが、既に天稟の才は芽ぐんでゐたと見え、十二歳の夏（明治十一年）には早くも漢詩を作り始めてゐる。五言絶句を毎日一つ宛作つて土屋氏の添削を受けてゐたが、最初の詩は、「聞子規」といふ題で「一聲孤月下。啼血不堪聞。半夜空欵枕。古鄉萬里雲」といふのである。この頃から稗史小説類に讀み耽り、手當り次第に筆を執ることを好んだらしい。

十三歳（明治十二年）松山中學入學、十七歳（明治十六年）松山中學を退き、叔父加藤拓川を頼り東京に出て、赤坂漢學塾、共立學校等に學び、十九歳（明治十八年）一ツ橋の大學豫備門に入學したが、この年に友人の下宿で讀んだ春廼屋隴（坪内逍遙）の「當世書生氣質」に大いに共鳴傾倒してしまつた。革新俳句道樹立の精神は、この頃から愈子規の心に培はれてゐたのであらう。「寒山落木」を讀むと、初めて、この年に俳句がある。小品、隨想等は逞しい子規の意力によつて、爾來書きつづけられてゐたのである。

子規の生命を奪つた病が、初めて具體的な徴候を現したのは、二十三歳（明治二十二年）の五月であつた。それは突然の咯血である。「子規」といふ俳號は、この頃から使ひ出したらしい。今迄、子規の雅號をみると、盜花、盜化、花盜人、莞爾生、沐猴、冠者、虛無子、放浪子、馬骨生、痴夢情史、蕪翠、丈鬼、うかれだるま、うすむらさき、浮世夢之助、花風病主人、浮世女之助、西子等々と、多くの氣まぐれの名を使つてゐたが、咯血の翌年の詩に「啼血三句號子規」と最初の雅號を記してゐる。

「僕は肺病で血を吐くから、常規を改めて常血つねのちとしようと思ふがどうだといふから、それよりは都子規つねのりとした方がいゝと云つて、笑ひ合つたことがある」

これは、親友大谷是空の言葉である。新海非風（卅五年十月没）の紹介にて、五百木飄亭と識つたのも此年であつた。

二十四歳（明治二十三年）六月に高等中學卒業。文科大學へ入學。國文科を修める。しかし翌年九月に大學を中途退學して、日本新聞社に入社してゐる。かくて、子規の社會的の活動は次第に本格的になつて來たのである。この子規の新聞記者時代とも稱すべき期間は、日

清戦争に従軍記者として出發してから、途中病を得て歸つた二十八年の秋頃までである。この時代は後年子規によつて俳句革新が爲されるための一つの準備期であつたのだ。

子規の作品に見られる痛烈な皮肉や諷刺は、この時代に、捲込まれた新聞界、政治界の雰圍氣が大いに作用してゐると思はれる。子規は、俳句を生命の糧としたけれど、狭い俳句の世界や文筆にのみ閉ぢ籠つてゐたのではない。新聞編輯といふ大役もこなせる相當の腕を有つてゐた。又、下宿屋の二階にくすぶつてゐた世に出ぬ中村不折を拾ひ出したのも子規の力であつた。荒々しい明治中期の新聞界に呼吸しながら、一方では靜寂石の如き文陣を構成し、社會の耳目を、その陣中に引入れる努力をつづけてゐたのである。ともかく、日本が初めて外國と矛を交へた日清戦争に、凡そ戦争とは縁遠い肺を病む一俳人が、従軍記者として、鷄林八道の煙焔臭い天地へ出かけて行つたのだから、誰しも驚いた。この點、子規の性格は誠に多角的であり飛躍性に富んでゐたのである。この従軍が、子規の生命を縮めた最大誘因であつた。歸國船上で咯血してから、子規は再び街頭の戰士として立ち得ず、三十五年九月世を去るまで殆ど病床の世界に生きたのである。しかし、病牀六尺の天地は狭いが、子規の俳

諧精神とも云ふべき強靱なる魂は、飽くまで子規の世界を闊ひ奪つたのである。子規には自己の信ずる藝術の世界に對する妥協はなかつた。子規の思想の嵐が赴くところ樹に附いてゐる古き葉は、總て吹き落してしまふのであつた。だから敵も多かつた。俳人として觀るときは、實に繊細な神経の持主であるが、人間としての子規の風格は「譬へば彼は巍峨たる峻嶺の如しで、之に向ふものは皆多少の畏敬を以て仰ぎ視たのである。洋々たる海の如き感はその柄ではない。彼は眼中無人で、嘗て古今を通じて崇拜といふが如きものは無かつたが、唯だその理想的の人物として、彼の傑僧日蓮とリンコルンの人と爲りを賞揚して居た。これは彼の人格を見る上に於て頗る興味ある所である。其の日蓮を賞揚するのは、偉大なる氣魄を以て非常なる逆境を獨り毅然としてあらゆる敵と戦ひ、終に自己の主義を貫徹した其の堅忍不拔剛邁不屈の大勇士たる點で、リンコルンに感心したのは、全く自己を没却して、道の爲め事業の爲めに一身を犠牲とし、自己の功は人に譲り、己れは唯人の背後にかくれて仕事をした點である。」云々と、飄亭の子規追悼の本文中に盡されてゐる如く、眞に「霸氣旺盛の日蓮的」であつた。

然し、子規は建設を忘れた男ではない。荒野から萌す新しき芽は、必ず培ひ育てたのである。その慈味掬すべき子規の他の一面は、永田青嵐（秀次郎）の「子規の印象」中の次の一節に躍動してゐる。

「子規に會つたのは一二回であるから、従つて子規に關して直接的には知る所が少ない。間接的には、明治二十八年頃より種々なる話を聞いてをつたから、子規居士の印象は非常に深いものがある。先達で「ホトトギス」誌に、俳諧懺悔といふのを載せ、その内に述べておいたが、初めて子規を訪ねたのは三十二年の秋であつた。當時自分は學校を出て、東京へ判檢事試験、辯護士試験を受けに来てゐたが、前の復興局長官、燕洋直木倫太郎と一緒に出かけたのであつたが秋だつたので、途中國子坂の菊を見、それから根岸へと行つた。子規は病床にあつた。此の時、驚いたのは、寝てゐて咳をし、血を吐いてゐたにも拘らず、子規は元氣頗る旺盛で、ひつきりなしに話をし、話の合間々々に俳句を作り、少しも倦みつかれる様子のないことだつた。その精力の絶倫にして、頭が好く、且つ氣力の強いのは、つくづく

と感服した。世人も好く知らるゝやうに、「病牀六尺」「墨汁一滴」「仰臥漫録」等は、いづれも病床にあつてかゝれたものだが、子規の努力には、人間離れをした強さがあると思ふ。私共が訪ねて行つた時には、丁度碧梧桐も来てゐたので、子規がこんなに人が揃つて居るなら、運座をやらうといつて二三題出して、俳句を作り合つた。その中で印象に残つてゐるのは吾々が途中國子坂の菊を見て來たといつたので「菊人形」といふ題を子規が出したことである。私は其處で、

一つ見て行き過ぎにけり菊人形

といふのを作つた。ところが選をすると、誰が作つたのか、

二つ見て行き過ぎにけり菊人形

といふ句があつた。で、ハハ人間といふものは、同じやうな氣分を抱き、同じ句を作るものだと思つた。が、「ひとつ見て」よりも「ふたつ見て」の方がどうも味ひがあるやうに思つたので私は「ふたつ見て」の方を取つた。しかるに子規は「ひとつ見て」の方を取つてゐる。さうして「ふたつ見て」の句は、誰が作つたのかと思つたら、子規居士自身が作つたも

のであつた。さうして「日本新聞」にも、私の「一つ見て」の方を子規はのせた。これを見た時、私は俳句の好し悪しは兎も角も、正岡子規といふ人は、後進を育てることに意を用ゐる人で單に俳句の革新といふこと以外に、將に將たる襟度を有つ人だといふことを深く感じた。碧梧桐、虚子、その他漱石、露月、紅綠等にしても、子規はそれ等の人々の特長を推奨して、各々にその長所、特性を發揮せしめる態度を取つたのは、皆さうした子規の氣持の現はれであらうと自分は思つてゐる。その態度は、恰も芭蕉が其角、嵐雪その他の面々に、各々の特長を發揮せしめて、之を統率して行つたのと同じだといふ感じがする。自分は「ひとつ見て」の句を、子規が取つて、自己の「ふたつ見て」をすてたのを見た時、彼の以上の如き性向の片鱗をみたかに思ひ、熱々感心したのである。——(後略)——(昭和三年九月)

子規の死生観は、「死後」(三十四年二月作)の中に委曲をつくしてあるが、病を得てから居士は既に早晚來るべき死を自覺してゐたに違ひない。つまり、その作品は死の警鐘を感じながら次ぎ次ぎと書き記されたものなのである。

子規三十一歳(明治三十年)の七月、河東銓氏宛の書中に次の墓誌銘がある。

正岡常規又ノ名ハ處之助又ノ名ハ升又ノ名ハ子規又ノ名ハ頼祭書屋主人又ノ名ハ竹ノ里人  
伊豫松山ニ生レ東京根岸ニ住ス父隼太松山藩御馬廻加番タリ卒ス母大原氏ニ養ヘル日本新  
聞社員タリ明治三十〇年〇月〇日没ス享年三十〇月給四十圓

これを書いた五年後に子規は没してゐる。

又、三十四歳(明治三十三年)の六月、夏目漱石(漱石イギリス留學決定の頃)宛の書簡に  
年を経て君し歸らば山陰のわがおくつきに草むしをらん  
の一首が見えてゐる。

蕪村に傾倒した頃(明治二十七年)からの子規は、その死の直前まで、客觀的、寫實的傾向に一貫した生活と句を残してゐる。絶筆の「丝瓜」の三句(本文参照)にしても、心憎いま

で自己の死を客観視してゐる。

「足あり、仁王の足の如し。足あり、他人の足の如し。足あり、大磐石の如し。」(病牀六尺)と、水腫の來た足を眺めながら、尙も筆を捨て得なかつた俳聖の生涯は、明治三十五年九月十九日午前一時を以て、苦闘三十六年の幕を閉ぢたのであつた。

翌翌二十一日、遺骸は瀧野川村字田端の大龍寺に葬られた。

幾度か危篤の中から蘇り、苦惱を克服して筆を執り、只管新文學精神完成のために突進した子規居士の一生は、一俳人の生涯とすべく餘りに大きく、鮮烈であつた。

子規を通して、築き上げられた新しき俳諧精神は、時代美の極致を行くものと謂つて過言ではない。かくてこの精神は、必然に現代にも及ぶべきであると共に、子規居士への追慕は愈々濃く、その作品の検討は更に深く繰返されるであらう。

## 四季の女

——小説・隨筆・紀行・新體詩——

### 筆 (新體詩)

さらばよ、少女。此日頃

世にわりなくも 馴れし身の

今は最期の別れなる。

なごりは更に 盡きせねど

別れでかなふ ことならず。

さらばよ、をとめ。心よく

わが取る筆の ほこさきに  
墨の雫と消えよかし。

かねて拙き 小説の

御身を拙き 初めしより

さびたる筆に 花咲きて、

われながら わが面白く

日赫赫たる 暑さには

したゝる汗を墨に磨り、

寒凜凜たる 冬の夜は

硯の氷を うち砕く。

圓滿なる人 只一人

うき世の中に 求めかね、

無垢清淨の 御身をば

しばらくかりに 設けつゝ

神聖にして 濁りなき

情をこゝに 寄せたれど

御身もとより 若くして

死すべき運を持てりしなり。

まことを言はば、初めより

殺さんために 御身をば、

まうけしものぞ。しかはあれど

此期に及び なまなかに

けだかき生れ うるはしき



姿に心 引かされつ、  
手はなえたるが 如くにて  
少しも筆は はたらかず。

いかになごりを惜むとも

別れでかなふ ことならず

わが萬斛の 血の涙

犠牲となりて 身をたふす

御身のために 瀝ぐべし。

さらば少女よ、少女。他日われ

文學者の名を 残しなば

そは皆御身の いさをなり。

明治二十九年九月五日

(新體詩)

### わがもの美し

一生に始めてうつくしと思ひそめたる面影は終身忘れ難く、それに似ぬ者は醜女と極りぬる事淺まし。昔眇の妾に心を入れたる人あり。此人には天下の女皆目が一つ丈多過ぎたるよし。一明治二十五年一月の都)

### 旅に見し十六娘

旅はなさけ、恥はかきずて、宿屋に著きて先づ飯盛女の品定め、水臭き味噌汁すゝりながらこゝに遊君はありやといへばござりまする。片田舎とて侮り給はゞ思はぬ不覺を取り給ふべし、などいふ、今の世の中に旅といふもの可愛い子にはさせまじき者なり。白河二所の關とは一夫道にあたりて萬夫も進まざる恐ろしき嶮岨、鬼も出づべしと思ひきや、淋しき町はづれにいかめしき二階づくり、火にぎやかにともし連ねたるを何ぞと近よれば、こゝも一廓秋風の吹かぬ處ぞかし。名所なつかしさに、某の君を見たてゝ一夜うかれ遊び酒一杯飲むに

もあらねば、素話身にしみて、かた様のお國はと問はるゝに、東京と答ふれば、吉原といふ處面白いさうな、吉原で遊び給ふ身のこゝらでは遊ばれまじ、といふ。東京は廣し、同じ處に居ても吉原は知らぬといへど誠とせず。そなたの生れはと問へば、越後でござりまする、朋輩の何がしは三年のつとめ濟んで、身のしる金で嫁入りしたさうな、うらやましやといふ。媚びるにもあらず、ふるにもあらぬ質朴の田舎かたぎ、おとなしきが氣に入つて、財布の底を拂ひたるもをかし、歸りがけに名を聞きしがそれも忘れける。鯖名といふ温泉にて雨にふられ、旅のうさ今更覺えけるを、廊ありと聞きて、宿屋の庭下駄に知らぬ闇路踏んで、凌晨咲く門に這入りける。翌朝、宿へ歸ればこゝの小もの笑ふて、ゆうべ旦那の買はれしはやつがれと同じ國の生れなりといふ。狭い處では一夜のうちにも何も彼も知れぬは無し。濱松にて東の間の逢瀬、何處やらに惚れこみ、志を少し紙にひねつて、彼にも知らさず其袖に投げこんだを、あとで何と言ひしやら聞きたし。大垣の宿屋、家は小さけれど間は綺麗なり。女の色白き事こゝの名物なるべし。膳はこぶ小女郎、あたり惜しきものと思へどせんなし。京にても宿屋の下女、さすがになまめきて、三日のなじみ、さはらば落つべかりしが、それ

もこゝにては掃き捨てる程ぞかし。それよりも不思議は、一生に只一度の思ひは残る木曾川の停車場とて田の中に茶屋三軒、其一軒に憩ひて汽車待ち合せしに、丸顔に眼涼しく色黒き女、十六ばかりに何の見處も無きが、これは又如何にしてか心の奥迄しみこんで、こゝに一夜を明す言ひ草まだ考へつかぬ内に汽車が参りました、お急ぎなされませ、と彼女かひんくしく我が荷物さきに持ちて走るに我もおくれじと汽車に走りこみける。其無邪氣な顔どうしでも今に忘れず。大方三人の子はあるべし。—明治三十二年七月— (旅)

### 八百屋お七の心境

昔から名高い戀はいくらもあるが吾は就中八百屋お七の戀に同情を表するのだ。お七の心の中を察すると實にいちらしくていちらしくてたまらん處がある。やさしい可愛らしい彼女の胸中には天地をもとろかすやうな情火が常に炎々として燃えて居る。その火の勢が次第に強くなりて抑へきれぬために我が家迄焼くに至つた。終には自分の身をも合せて其火中に投じた。世人は彼女を愚とも癡ともいふだらう。ある一派の倫理學者の如く行爲の結果を以て

善惡の標準とする者はお七を大悪人とも呼ぶであらう。此無垢清淨、玉のやうなお七を大悪人と呼ぶ馬鹿もあるであらう。けれどお七の心の中には賢も無く愚も無く善も無く悪も無く人間も無く世間も無く天地萬象も無く、乃至思慮も分別も無くなつて居る。有る者は只一人の、神の様な戀人とそれに附隨して居る火の様な戀とばかりなのである。若し世の中に或る者が存して居るとすれば其者が家であらうが木であらうが人であらうが皆此戀人のために又は我戀のために存して居らねばならぬ。然るに其物が少しでも此戀を妨げる者であつたならば、家であらうが木であらうが人であらうが片端からどしどし打毀して行くより外は無い。此戀が成功さへすれば天地が粉微塵コツパイになつても少しも驚きはせぬ。若し又此戀がどうしても成功せぬときまつた曉には礫はりつげに逢はうが火あぶりに逢はうが少しも悔む所は無い。固より悔む所は無いのであるけれど併し死といふ事が恐ろしくあるまいか、かよわい女の身で火あぶりに逢はされるといふ事を考へた時にそれが心細くあるまいか。家を焼くお七の心がいちらしいだけそれだけ死に臨んだお七の心の中があはれであはれで悲しくてたまらん。死に近づく彼女、心の中は果してどんなであつたらう。初より條理以外に成立して居る

戀は今更條理を考へて既往を悔む事は無い筈だ。ある時はいとしい戀人の側で神鳴の夜の物語して居る處を夢見て居る。ある時は天を焦す鉄はのかの中に無数の惡魔が群ぐまりて我家を焼いて居る處を夢見て居る。ある時は萬感一時に胸に塞がつて涙は淵を爲して居る。ある時は惘然として悲しいとも無く苦しいとも無く我れもあらで脱殻のやうになつて居る。固よりいろいろ苦んで居たに違ひ無いけれど、併し其苦痛の中に前非を後悔するといふ苦痛の無い事はたしかだ。感情的お七に理窟的後悔が起る理由が無い。

○

人間世界の善惡が善惡の外に立つ神の世界の戀に影響のしやうが無い。併し火をつけたのが悪い事と感じた瞬間には、本心に咎める所があつて、あんな事をせなんだら善かつたと思はずには居られまいと思ふがどうであらうか。なか／＼以てそんな事は思はぬ。それなら其瞬間にはどういふ事を思ふて居たらうか。それは、吉三は可愛いと思ふて居た。

—明治三十二年三月—

(戀)

### 海に浴る少女

翌日空うつくしく晴れて日落つるより星一つ二つ輝き初むる頃例の處に行きぬ。在り、在り、女神は既に在り。乳より上を波の上に現して、白き單衣を著たるが汐に濡れたればさながら肉體の如し。髪は振りさばきて後に垂らしたるが端は波に浸りたらん。今しも少女は彼方を向きて靜かに沖を見つめ居たるが、東の方雲少し破れて、鏡の如き十六夜の月は少女の胸より上りぬ。平らに幅廣き波の、ふはりと寄せ來る海は一面にふくれる、少女も波につれて、ふはりと浮く。月は今少女の頭光の如く見ゆ。嗚呼、神、神、よも人間にてはあらじ。少女も動かす、正美も動かす。月獨り動きて少女の頭を離るゝ時雲に入りかゝれば少女は見えずなりぬ。正美は雲間をのみ眺めぬ。やう／＼にして月は再び雲を出でぬ。金龍波を走りて海一面に照せども少女ははや見えざりき。(未完稿—明治三十年四月カ—) (月見草)

### 胡蘿蔔と女

○酒は男の飲む者になつて居つて女で酒を飲むものは極めて少ない。これは生理上男の好くわけがあるであらうか、或は單に習慣上然らしむるのであらうか。寧ろ後者であらうと信ず

る。

女は一般に南瓜、薩摩芋、胡蘿蔔などを好む。男は特に之を嫌ふといふ者も澤山無いにしても兎に角女程に好まぬ者が多い。これは如何なる原因に基くであらうか。

男でも南瓜、薩摩芋等の甘きを嫌ふは酒を飲む者に多く、酒を飲まぬ男は之に反して南瓜などを好んで食ふ傾向があるかと思はれる。して見ると女の南瓜などを好むのは酒を飲まぬ爲であつて、男の之を好む事が女の如くないのは酒を飲むが爲ではあるまいか。酒は酔の物の如き類とよく調和して、菓子や團子と調和しにくい事は一般に知つて居る所である。南瓜、薩摩芋、胡蘿蔔などは野菜中の最も甘味多き者であるので酒とは調和しにくいのであらう。酒飲みでも一旦酒を廢すると汁粉黨に變る事がある。して見ると女は酒を飲まぬが爲に南瓜などを好むのに違ひない。—明治三十五年七月七日— (病牀六尺)

### 女四十にして淺草を知らず

東京に生れた女で四十にも成つて淺草の觀音様を知らんと云ふのがあつた。嵐雪の句に

五十にて四谷を見たり花の春

と云ふのがあるから嵐雪も五十で初めて四谷を見たのかも知れない。これも四十位になる東京の女に余が筍の話をしたら其の女は驚いて、筍が竹になるのですかと不思議さうに云ふて居た。此女は筍も竹も知つて居ただけれど二つの者が同じものであると云ふ事を知らなかつたのである。しかしこの女は無學文盲だから特にかうであると思ふ人も多いであらうが決してさう云ふわけではない。余が漱石と共に高等中學に居た頃漱石の内をおとづれた。漱石の内は牛込の喜久井町で田圃からは一町か二町しかへだたつてゐない處である。漱石は子供の時からそこに成長したので。余は漱石と二人田圃を散歩して早稲田から關口の方へ往たが大方六月頃の事であつたらう、そこらの水田に植ゑられたばかりの苗がそよいで居るのは誠に善い心持であつた。此時余が驚いた事は、漱石は、我々が平生喰ふ所の米は此苗の實である事を知らなかつたといふ事である。都人士の菽麥を辨ぜざる事は往々此の類である。若し都の人が一匹の人間にならうと云ふのはどうしても一度は鄙住居をせねばならぬ。三十日

一明治三十四年五月一

(墨汁一滴)

池畔の少女(小説)

今日は花見の宴にと直人は叔母の家へ招かれぬ。盃一めぐり二めぐり、はや櫻色に照りそふ大座敷に主客入り亂れての無禮講、折から來合せたる水口浪子の琴の秘曲、直人が得意の仕舞いづれ劣らぬ堪能の其あとは、盃飛び皿碎けて酒の泉溢れ肉の山崩れ下戸は座に堪へず。數寄を盡したる前栽の趣、遣水の流れもただならぬ築山づたひ、池の汀の小石道少し曲れば今を盛りの花の雲に埋れて悄然と立つ少女の姿、櫻の精の抜け出でたらんかと驚く直人は胸を靜めて二歩三步近づきて徐ろに立ち留りぬ。今更逃ぐるにも逃げられぬ少女は目たゞきもせず眺めたる池の面、何とはなしに直人も詮方なきまゝ見詰め居れば、それと知るや知らずや樂しげに群れ遊ぶ魚の様。

緋鯉四五尾、稍々白み勝ちなる斑入の大きな鯉一つ、黒き鯉十餘尾上下左右に重なりて池のかなたより群れくる目あては、水の真中に蹲る大石一つ、石の鼻に來れば群鯉二つに割れ、一群は右より一群は左より石を廻つて再び勢を合せ左に曲りて松の木陰に頭をあつめ、

一二遍くるり／＼と廻る其輪おのづとはじけて又長き隊を組み渚に沿ふて遠く去りぬ。見る  
／＼再び寄せくる隊伍整々一直線に大石を目がけてアハヤ突き當らんとする途端何に驚きて  
かはつと隊を崩して横へ散り底へ潛みし鯉群、再び水面へ浮び出づれば自らなる鶴翼の姿を  
爲して、もと來し方へ歸る道すがら兩翼少しづゝ縮まりて、もとの隊伍整々敗軍を收めて歸  
り行く自然の妙機、一心に見とれたる直人は「あゝ面白」と叫びぬ。

群鯉去て跡なく、水は漣漪をつくりて松の影ゆら／＼と龍尾を揺らすより外には物も見え  
ぬ池の面、いづくよりとも無く薄桃色の大鯉唯獨り悠然として現はれたり。右へ廻り左へ返  
し高く浮み低く沈み、のゝ字に泳ぎ巴に遊び序破急と次第にはやめて再び序に戻り全く靜か  
に體を定めてしんとする時、忽ち其尾に力を入れて一掉り掉れば眞一文字に一間許り進み、  
勢よわる所を尾を右に軽くひねれば石に添ふて左に曲り、渚に近よれば急がしく尾を揺が  
して杭の間を潛りぬけ、遠く廻りて池の眞中に浮み出づる時、颯と吹く風にさそはれてもろ  
くも散る櫻の花一かたまり空に舞ひて少女の鬢を掠め、池の上にひら／＼と落る影に驚きけ  
ん、きやぶんと音して忽ち深く沈みし大鯉、靜に浮みて水に漂ふ落花一片ばくりと飲み込み

て少し沈み再び浮き上りてさゝ波と共に吐き出す花片、其まゝ身を返して彼方の岸に行き止  
まり忽ち頭を沈めて底へと潛めば、しばし水面に動く尾も終に隠れうせし後には散りうく花  
幾片水と共に渦巻くけしき、少女は我知らず漏らす玉音「ああ美し」落花心あれば流水亦情  
を知る、つれなしと誹る一陣の風伯、梢の雲を吹き散らして水の上に積む雪、さゝ波に盛め  
らるゝ造花の美術今更につれなしと誰か思はん。三十六鱗老いて龍門に上るの念もなく、空  
しく小池の中に住みて花に戯るゝ今の心、何も彼も打忘れて樂める姿、お浪様何と歌に詠み  
て下さらぬか。問はれて驚く少女心轟きながら「拙き歌にはいかで及ぶべき、畫師ならばこ  
そ筆にもすべき此美しさ」其畫師にも畫けぬ程の美しき者此他にあり、それ見せ給ふ氣は無  
きか「筆捨山といふ名所ありと豫て聞けばそこに尋ね行き給ひ天下無雙の景色飽く程見て來  
て其話聞せてたまはれ」「いや筆捨山の景色見る迄も無し。今こゝに立てる美形一つ」「それ  
は何」昔漢土の某といふ女はおのが像を三度畫き直させしといふ、それにはあらで幾度畫く  
とも畫かれまじき眼前の美形」「其謎は解けました」「それは」「いはでもうつくしき此櫻花、  
昔より畫き劣りのすると申せしもの違ひはあらじ」とそらされて「其櫻花よりも猶うつくし

く、しかも物いふ花まだ推し給はずや」さらば花の露に永き日を轉る鶯か」と再びそらされ  
て直人もどかしく「櫻と鶯を一つにしたる貴女の容貌女神にも遙か勝りて歌にも畫にも盡さ  
れまじ」と言ひ放たれ「なぶり給ふもことにこそ」と顔赤らめてうつむく嬌態消えも入りた  
き様に、こなたもきまり悪げに俯向きたる直人、幾度躊躇ひし口吃らして「我家へは來て給  
はらぬか」と思ひきつていへば「來年の花見には參るべし」と又そらされて、今度は清水の  
舞臺より飛ぶ覺悟「只今は來給はぬか」

忽ち樂山の彼方より「姉様々々」と妹に呼ばれて「今行きます」と逃げ行きたる後見送り  
て惘然とかたへの櫻の木にもたれ、吐息つく／＼見上げたる春の空まだ暮れやらぬ夕の雲を  
西日に彩りて色紙に似たる其中に銀泥もて畫きたる三日の月影、一刻千金とは安い者なり。

—明治二十五年—(月の都)

### 心に描く女(小説)

三十一文字の徳は神明に通じ十七文字の感應は鬼神を驚かすといふめるを、花に寄せ鳥に

寄せては詠み出づる歌に戀の誠をあらはし、月に比へ雪に比へては口すさむ句に世になき美  
人の面影を偲ぶことゝに何年、斯くても猶出雲の御神玉津島明神をはじめ八百萬の神々は  
知らず顔にうしろむき給ふは如何にぞや。末世に及びて神靈も衰へたるか我が信心の足らぬ  
か美人一人今の世になき事かと許りあけくれ歎くすき心。浮世もよしや足引の山の手邊に住  
居して今業平と正札つきの桂男、目には見ゆれど手には取られずと歎つ近所の評判、まだ十  
三の歳より道德堅固の高僧を三度振り返らせて罪を造り初めけるとなん其名を高木直人と云  
ふ。

直人若してゝら二布を夕顔棚の下風に吹きひらめかす簀の子の陰に生れなば、麥刈り時の  
村芝居鎮守の森の盆踊りは引く手数多の身一つを、こゝの藪陰に月を忍びかしこの畔道に夜  
風を恨むこともあるべし。あるひは出入に踏鳴す下駄の響とひねもすはじく十露盤珠の音の  
みかしましき其中に産聲高く生れなば、開帳の歸り念佛講の崩れは此の里の夜櫻に三十日の  
月と傾城の誠を知り、南の廓の有明にきぬ／＼の柳其うしろ髪を引きたらんも、あはれや直  
人部の眞中に生れなまじひに數々の書など讀み覺えしからに中々に催馬樂めきたる片田舎の

かざりなき人情も知らず、菊蔦本の一二冊繕げて廊とは何處の外國ぞ、ナンシ、ザマスといふ言語英書よりもむつかしとぞ言ひける。

「薄氷一夜泊りの情に水漏らさじとの仇言謔より出でて誠に根引したる曉には先づ小指の不具なるを悔のはじめ、朝日の影横窓に縮まりて下女飯を炊ぎ終る頃やう／＼食の中より片手現して煙草二三服すばり／＼と吹かし、やをら身を起して、欠伸、嚏のありたけをならべたて、三度の食事には總菜の苦情、毎日の化粧には結髪の小言、大事の晝をうか／＼と暮して夜は大引迄のしやべり續け、義理の母親を陰にては鴛母とぞ呼びける。これではまさかソクラテスも堪忍なるまじと、ある人の話されたる、何の事やら分らねど兎に角に傾城といふもの嫌なり。

さはなくとも女學校の學生、繩簾を引きすり牛の糞を戴き太き踵を細き靴にわり込み、埃蹴立てたる歩行様を男女同權といふとか。やんごとなき際は夜會舞踏會に喜んで毛だらけの鬼の手を握り、其次は男女交際會に赤きハンケチ卷きたる首玉にかじりつき、其次は一枚のケツトーに二人くるんで近所の寄席に出かけ、下々の下は薄暗き木陰に行んで洋服の書生に

は袖がないと申すよし。世はさまざま、其女學生を妻と定めて五百圓の年俸に箱馬車をねだられ、味噌や澤庵は不消化物と名を變へ島田鬻や振袖は野蠻時代の遺風と定まりたる事情なし。日曜の散歩、花時の花見はこれ見よがしに手を繋ぎ、網ごしの顔を覗き込みて淺草の觀音程に有難がる馬鹿らしさ、見るも嫌、聞くも嫌、女學生といふもの傾城よりも猶嫌なり。釋迦去つて彌勒來らず、紫女死して淑女無きことこゝに千年、せめては祇王、祇女、佛、常盤、靜、小紫を一つに春き團めて造物主にこね直させたる程の者にてもあるべし。この廣き武蔵野に紫のゆかりの一本は」と覺えず微笑む意中の一物、人を誤り身を傷る毒矢なりとは白眞弓、引けばより來る戀は曲者、早くも覗ふ一分の虛。—明治二十五年— (月の都)

### 曼珠沙華縛る少女 (小説)

聞けば極樂とて羨ましいが、さて極樂に住む身は、衣食住の樂みといふ事も無ければ、蓮の花が四時咲き通して、迦陵嚩伽が晝夜啼きつゞけでは、まさかに善導が法然でも飽きたまはぬ事はあるまい。況して凡夫の悲しさは、貧乏は金持を羨み、下役は上役をねらひ、位高





く官高き者は品格を保つて行かんならんが爲に思ふ存分の道樂が出来んとて愚癡をこぼして居る。いづれにしても變化なき生活が感情の強い者に不愉快を興へ、窮屈に束縛せられたる境遇が才の走つた者に不平を起さしむるのであらう。野村の家の總領息子、名さへ玉枝とて女のやうな優しい生れ、今年十六七の花盛りに、固よりかしく慈悲深く、學問さへすぐれて居るので、此家に此子、未來の治右衛門のおひさき見えて野村の礎はぐすとも言ふまい、と人は皆譽め美めど、何がどうしたか、玉枝の塞ぎ様、朝から晩迄物も言はねば笑ふでもない、苦蟲踏潰したといふ顔つきで黙つてぼんやりと机にもたれて居る、机に凹みが出来はせんかと思はれる程で。乳母は晝飯の膳を下げに来て、どこぞ御氣分が悪うございますか。と尋ねた。これは毎日斯ういふて聞くので今日も聞いたのだ。玉枝も毎日聞かれた時のやうに今日も黙つて居る。

○  
ジャケットに竹の鞭、子供らしき打扮に、何やらいふ乳母の言葉を聞き捨て、裏門より逃げるやうに飛び出したが、町はづれの小社の後へ来て、ほつと息をついた時、玉枝は始めて自

己を知覺した様子であつた。

見渡せば稻田遠く西に開けて、南を劃る一帶の土手は松、檜、榎など枝を參へて森の如く茂つて居る。監獄署の高き白壁と黍畑との間の小道を通り抜けて土手へ取りつくと、少し心が落着いたので、下闇をぶらりくと草木など鞭で叩きながら歩行して居た。名高い化地藏の前へ來ると子供心に恐ろしく思ふて居た名残で今も氣味が悪いけれど、一足横へ踏み込んで其前へ往て見た。いつでも此地蔵の首は前の方に轉がつた儘であるのが、今日は首が胴に載せてある。載せてはあるが眼口鼻が見えぬので若し石ころではあるまいかと猶近よつて見て玉枝は覺えず笑ひ出した。首は横向いて著いて居る。思はぬ處で地藏に笑はされてから後は獨り歩行して居ても何か分らぬが無暗にをかしい。いつでも走つて通り抜けて居た墓原へ來ても恐ろしくはない。赤い信女が鄰の怪しき居士の膝に倒れかゝつた儘、そこを枕に寢て居るもをかしい。新墓の供物をつついて居た鴉が人影に驚いて樹の枝へ飛び上り何やら喰ふて居た物をつい取り落してそれを拾ひにも得下りす惜しさうに阿房阿房と鳴いて居るものもをかしい。日頃玉枝の胸の中にかたまつて居た鬱結は此日此時一時に笑ひとなつて蒸發し了つ

た。向ふの紙漉場に干してある紙が木の間に白く見えるのも愉快、あちらの村社に二三本帳が立つて居るのも愉快、知らぬ鳥が鳴いて居るのも愉快、小さき蟲の飛んで居るのも愉快、若し周圍の萬象に靈魂があるならば彼等は今たしかに玉枝を中心にして活動し始めたのであらう。

ふつと耳を貫く音に立ちどまつて見廻せばいつか三の淵に来て居る。玉枝は何か急に思ひついたやうに、彼處の木の間に、此處の草むらと、道無き處を探し歩いたが、終に堤の林を離れて田の縁に出た。返さうとして彼方を見れば土手を十歩許り離れて田の中に一塊の高まり、何とも知れぬ大木一株雲に聳えて、其下には今を盛りの曼珠沙華が透間も無く生えて居る。それが傾く西日に映りて只赤毛氈を敷きつめたやうな。其中に坐つて何やらして居る一人の小娘を見つけたので、あれに聞いて見ようかと獨り言して畦道づたひに小高き處をぐるりと廻りて、少女の後からそつと覗いた。乞食でもあらうか襤褸のきたない著物に、帯は何やらの片側に赤き唐縮緬をつけたのを繩のよれた如く結び、髪は只やたらに束ねて居た。足投げ出して居る側に草花少し入れた籠を置き、そこらにある曼珠沙華を捲りては餘念

なく絲で縛つて居る。

玉枝は後よりだしぬけに、

オイ。

と驚かした。驚いて振り向くだらうと期したるに違ひて、聞えたか聞えぬか、少女は返事さへせぬ。

こゝらに昔の大將の討死したといふ塚があつて石が立つて居るといふのはお前知らんかと問へば、

此石より外に石の立つとる處は知らんがなア。

と顔で教へながら、手に持った花束を腹立たしげにぐしゃぐしゃと揉み潰して、玉枝の足もとへ投げ出した。見れば大木の根元に立つたる石碑、これにかあらんと玉枝は裏表幾度となく見たが、苔蒸し石彫けて一字も讀むことは出来ん。爲ん方なさに一足後へ戻りて少女を見れば、投げ出した左の足の拇指の尖、石杯に躓きてしたゝかに傷つたと見えて、足首のあたり迄血に染みて今も少しづゝ流れて居るけれど、それも知らぬ態で只花を束ねて居る。

初めは残酷なやうに思はれたが、自分が平氣で居るのは心に氣高い所があるかとも思はれて、何とはなしに去りかねて、佇んだまゝ何をするか見つめて居た。女は花籠にある賣れ残りとおぼしき桔梗の束を捲つては一つづゝ糸にてくゞり合せ又くゞり合せて、それを圓く玉のやうにしようとして居る。玉枝は其成功を見る迄と、側に立つて居るが、女はそれには頗著せぬ、寧ろそれを知らぬのもあるらしい。やがて桔梗の花束は餘程出来上つたが、今一つ二つ花が足らるので、籠の中を探したが、もう花は盡きてしまふた。女が困つて居るのを見て、先より此花束に同情を表して居た玉枝もひどく心で困つて、どうかして助けてやりたいと思ふて居る内、ふと思ひ出して自分の帽子に挿んで居た桔梗を黙つて女の前に投げ出した。女はそれを黙つて拾ふて、やう／＼花束を完成した。それを手の上に轉がしながら女は一寸玉枝を見あげてにつこり笑ふた。玉枝の體にある總ての神経が一時に物に感じたやうに動いた。此時初めて女の顔を見たが、年は十五六でもあらうか、眼圓く鼻低く、赤き唇、白き齒、善き容貌にはあらで、恐ろしと見える處もあるが、肥えたる薄赤き頬の眞中に壓をこ

しらへて笑ふと、言ふに言はれぬ一種の愛嬌がこぼれて、それが人の心を穿つ程の力を持つて居る。

玉枝は好奇心と魔力に打たれて見て居たが、頻りに桔梗の玉がほしくなつたので、買ふて取らうと思ふたけれど、生憎金を持つて來なかつた。どうしようともち／＼して困つて居たが、

其桔梗くれんか。

と試みに言ふて見た。

女は何も言はずに花を草の上へ轉がしたまゝ見向きもせぬ。大方吾に取れといふのであらう、と推して玉枝は急いで拾ひあげた。毘沙門様のお籠にでも中つたやうに嬉しさうに見て居る。

今日は何も無いが、こんど持つて來る、明日でも……桔梗程好きな花は外に無い……ひとり言のやうにつぶやくやうに言ふた。

桔梗や何か。

女も口の中で言ふた、極めて桔梗を輕蔑したらしい調子で。

桔梗は嫌いか、何が好き……何が。

また曼珠沙華をむしつてくくり合せながら、

好きな花を言ひあてゝお見なさい。

玉枝はしばらく呼吸をはかつて、

お前の好きな花ちふのは女郎花ぢやろ。

違ひます。

そんなら萩か。

イ、エ。

朝顔。

首を振つた。

撫子。

又首を振つた。

少し考へて、

分つたく、秋海棠。

とても中らんといふ顔付で黙つて居る。

秋草ではないのかい。

今咲いて居るがなア。

咲いて居つても人の知らぬ草ぢやないか。

誰でも知つて居るがなア。

今迄立つて居た玉枝は我知らず其所へ腰を据ゑて、鞭を振り動かしたつゝ、

分らんく。江戸菊でもあるまいな。

黙つて居る。

鶏頭か知らん。

花束をくくりたる絲の残りを齒にて切りながら、首を振つた。玉枝は少しいらだつて来て

何。何。到底分らん。

とせき込んで問へど、矢張黙つて花をこしらへて居る。今しもやう／＼のことで出来上つた花の塊、今度は桔梗の代りに曼珠沙華を薬玉の如く丸くしたるを嬉しげに打ち眺めては、絲にぶら下げて見ては、又手に置いて見ては、終にそれを玉枝の鼻尖にぶらさげて、

此花ぢやがなア。

玉枝は意外なのに驚いた。

それは葬禮花、死人花ぢやの言ふて、人のいやがる花ぢやないか。葉も枝も何も無うて、ぼんと立つて、墓原などに生えるもので、色と言や厭赤い、赤うても子供も取らん、それが好きかい、その誰でも嫌ふ花が。

そぢやけん、可愛がつてやるのぢやがなア。

花の束を見つめて居た少女は少し力を入れて言ふた。沈んだる聲に悲しき調子を帯びて、一時出まかせの口の先の笑談とも聞かれななんだ。

みいさん。乗つて往かんか。

しばし話のときれたる此場の静かさを破つて、此聲は聞えた。玉枝はうろたへて立ち上り

ながら振り返ると、彼方の畦道に童が牛を牽いて此方に向いて立つて居るのを見た。

鎌さんや。今戻りかな。今日はもう城下を歩行くのも厭ぢやし、内へ去んで叱られるのも厭ぢやしと、こゝにくづ／＼して日を暮して居つたのぢやが、乗せてくれるなら去なうかな。

花籠持つて起き上りたる少女は籠の底より一箇の花の薬玉、おのが手にあると同じやうなるを取り出し、それを前の一と一程置いて連ね下げて、其糸を長く首に掛けた。二つの小さい薬玉は胸に下がつてゐる。女はうれしさうに我胸を下目で見ながら畦道へ出て往た。

お前、足を怪我したか。

鎌とやらが問ふた。

悪まれるとたと石に迄悪まれるけん。誰ぢやて一人可愛がつてくれやせん。

少女はちよと笑みながら容易く牛の背へ後向に乗つて、童が下からさし出す我花籠を受け取つた。

みいさん方の叔父さんは、みいさんをどうして憎むかな、徳さんは可愛がられるけんど。

牛追ひく歸り行く二人の話は玉枝に聞えぬ程に遠ざかつた。女の顔も見わけのつかぬやうになつた。胸に掛けて居る二つの勳章は夕日に映つて動いて居る。右へ曲つた。低い處へはひつた。小川を渉るのであらう。又寒い處へ出た。動かぬやうに見える。夕霧は薄く立ち罩めて牛も人も只紫色に見ゆる時、玉枝は我家に懸けてある、白象に普賢菩薩の古畫を思ひ出した。(曼珠沙華)

### 蛇使の娘(小説)

花籠提げた少女は小川に沿ふて薙草茂りたる田圃道に來た時、何だか目早く見つけて、草むらを分けて見る途端、縞蛇一つする／＼と川を渉つて逃げるのを見送つて、

早う逃げエ。早う／＼。遠い處へ逃げて往て、二度とこの邊へ出て來ちや、いかんよ。

こゝらでまご／＼しとると、屹度ひどい目に逢はされるけん。

獨り言いひながら板橋を渡つて形ばかりの門を這入つた。十を少し越えたりと見ゆる童の戸口に遊んで居るのを見て、其側に立つて、する事を見て居た。童は小さき蛇を手に巻きつ

けたり、解いて見たりして楽しんで居るので、若し之を都の人に見せたら、さぞ、淺ましい者と、驚きも、さげすみもするだらう。けれども何も不思議は無い、蛇使の子が蛇使になるのは醫者の子が醫者になるのと同じことなのである。蛇が可哀さうだと言ふなら、百姓が牛馬を使ふのは、牛馬が可哀さうと言はねばならぬ。牛や豚を殺して食ふのは猶更可哀さうと言はねばならぬ。蛇を恐ろしいものゝやうに言ふて、見さへすりや打ち殺すが普通の人の爲る事ぢやないか。その蛇を飼ふて可愛がつて見せるのは普通の人より慈悲が深いのである。これは、死んだ女房が生きて居る内に子の教育に就いて、蛇の事に就いて、夫に訴へた時の夫の答であつた。

姉が歸つて來て見てくれるので、童はますます得意になつて、藝のありたけを盡して居る。

姉。どうぢや。おとなしいぢやないか。こいつは善が黒はいかん。これが一番好きぢや。

何でもいふこと聞く。

小さき蛇を手のひらにつぐねたり、紐のやうに結んだりして、姉の眼前へつきつけて見せた。眼ばかり光る色黒き童の顔には、普通の人の解釋し得ぬ一種の笑ひを含んで居る。

徳や。お主、どうしてお祭見に行かんけ。お父について行きや善えのに。お祭嫌ひけ。それでもお父が往かれんと言ふたもの。往きたうないのけ。どうしてもついでと言や善えに。言はんけん。來年になつたら連れて往くと言ふた。それ迄に善う使へるようにならにや、連れて往かんと。

そないなと言ふたけ。好かんお父ぢやのう。蛇使ふたりさゝいでも、只連れて行きや善えのに。お主、お神輿様の後から子供と一緒に往て遊びたうないけ。著物が無いもん。

女は愀然として立つて居た。

可哀さうぢやのう、著物が一枚無いのぢやけれ。お母が生きとつたら善えののう。お主、お母の顔、覚えて居るけ。ム、知つとる。

知つとる。そんなら、お母が蛇や何か、可哀さうに遊び事にするものぢやない、あんま

りひどい目になると、畜生に生れ變るて、お主を叱つて居つたのを知つとるけ。

童は手持無沙汰に蛇をいぢくつて居たが、變な顔をして姉の顔を見あげた。

生れ變るて、どうするのけ。

畜生になるのよ。

何時から畜生になるのけ。

何時か知らんが、なるのよ。

ほんたうけ。

ほんたうよ。

畜生て、何になるのけ。獅子なら善えな。獅子が一番強い。馬でも牛でも皆負けるのぢや。人でも何でも皆くふてしまふのぢや。

蛇をひどい目にしたら、蛇になるかも知れん。

蛇なら構はん。黒蛇が善えな。強いけん。

少女は稍々呆れた顔で童を見つめて居た。

あらあぢやが、お主は蛇になつて、ひどい目にしられたり、杖で叩き殺されたりしても構んのけ。

ひどい目にしられちや厭よ。

お主ぢやてゝ厭なら、其蛇も可哀さうぢやないか。逃がしてやらんけ。それ逃がしてやつたら、明日お主の好きなもの買ふて遣るぜ。

あの赤いお菓子買ふてくれるけ。そして毎晩一緒に寝てくれるけ、いつやらの様に、獨り寝るのは恐ろしいけん。

オ、く。お菓子はたんと買ふてやるし、夜は一緒に寝るし、それから兒來也のお話もするし……

兒來也は強いなア。あれから勝つのけ負けるのけ。

これからが面白い處ぢやけん。寝たら次を……

橋板を踏む音がして、親父の咳拂ひが聞えたので、少女は急ぎかけこんで、籠は土間の隅に投げ出し、茶の間で土瓶の下を掻きまぜて居る。(曼珠沙華)

## 花 賣 娘 (小説)

桔梗、刈萱、千日紅は宜しう。尾花に女郎花は宜しう。

草花を少しづつの束にくゝつて、花籠に堆う盛りたるを、紐は前にて持ちながら、籠は背に掛けて居る。見る影も無き著物の胸も合はぬに、丈さへ短くて脛もあらはに、跣足の儘で町々を呼びありく女花賣は何時に無く力無ささうに見える。

桔梗に紫菀に吾木香……宜し……

やさしき玉を轉がすやうな聲は震へて、臉には露を湛へて居るらしい。身に餘る思ひを胸の中に收めかねて、居るに居られず、言ふに言はれぬのであらうとは無邪氣な若き顔にも現れて居る、とぼくと歩行く内、ふと聲を掛けられて、見ると人力車が突つかゝつて來る勢ひに恐れて飛び退いた。車は二台で前の方のは二十許りの島田、後の方は洋服著た紳士、どうしても夫婦と見える年ばへ、打扮だ。花賣は稍々しばし車の後から見送つて居たが、車が見えんやうになると、歩行き出した。十歩程行くと又立ち止つて、嚴しき濡門の内を覗いて



見て居る。先の車は此家から出たと想像して覗いて居るのであらうが、何故覗いて居るのかは分らん。門の内に寝て居た犬が何に驚いてか眼を明いて見ると、人が覗いて居るので、烈しく吠え初めた。花賣が歩行き出すと、犬は門の前迄出て吠える。それでもまだ満足せんので後を跟けて往て吠えて居る。人の屑の非人として、同じ仲間の人間より畜生の如く取扱はれるを見て犬迄が輕蔑するであらう。併し犬は美しき著物著て通る者は吠えぬ。彼は絹布と襦袢とを區別する能力を持つて居るが、泥坊と佛とは一つだ。

花は宜しう。花は宜しう。

呼び歩行いても買ふてくれる者が無い。人にも犬にも見捨てられた此少女の愁を、天は見知り顔に怪しく曇つて來た。——明治三十年——（曼珠沙華）

### 元祿の四俳女

元祿前後の俳諧に遊ぶ婦女子の中、まづ捨女、智月、園女、秋色を以て四傑とも稱すべし。すて女は燕子花の如し。うつくしき中にも多少の勢ありて、りんと力を入れたる處あり。智

月尼は蓮花の如し。清淨潔白にして泥に染まぬ其色浮世の花とも思はれず。秋色は撫子の如し。ゆらくと風に立ちのびてやさしうさきいでたる、中々にくねりならはぬあどけなさに其人柄まで思ひやられてなつかし。園女は紫陽花の如し。姿強くして心おとなしきは俳諧の虚實にかなひ、日々夜々の花の色は風情の變化を示して終に閑雅の趣を失はずともいはん。而して四女の中句作にては、余は園女を推して第一とす。園女は見識氣概ありて男子も及ばざる所あり。其某禪師に答ふる書の如き曾て婦女子の婉柔謙遜なる所を失ふて唯々剛慢不遜なる一丈夫の趣あり。されば其俳句に遊ぶに際しては決して婦女子の眞面目を離れず。蓋し得難きの女傑と謂ふべし。近時の女學生以て如何となす。これらの人々の俳句に就て三四を抜萃して左に掲げん。

うき事になれて雪間の嫁菜かな

日くらしや捨てゝおいても暮る日を

思ふ事なき顔しても秋のくれ

粟の穂や身は數ならぬ女郎花

す  
同  
同  
同



子もふます枕もふます時鳥  
 男さへきかれぬものを郭公  
 折からの嫁くらべ見ん田植哉  
 けふばかり男をつかふ田植かな  
 早乙女に足洗はするうれしさよ  
 早をとめや若菜つみたる連もあり  
 出女の口紅をしむ西瓜かな  
 紅さいた口もわするゝ清水哉

其代角 千代言 千代角 其代角 千代考 支代角 千代考

餘所目に見る支考の句はをかしく我身の上を思ひかへしたる千代のはいとほし。

白菊の目にたてゝ見る塵もなし  
 白きくや紅さいた手の恐ろしき

芭蕉 千代

芭蕉は園女をほめて吟じ千代は己を卑下して詠ず。

妹なくてうたゝね悔ゆる火燧哉  
 尼になりしとき  
 髪を結ふ手のひまあいてこたつ哉

浅山 千代

一明治二十五年六月一十月一（癩祭書屋俳話）

をみなを詠める

—和歌十六首—

戯れに畫をかきて女の許へつかはすとて

きみならて誰にか見せんおのれたにつたなしと思ふ水莖の跡

(明治二十一年)

中垣の境の桃は散りにけり隣の娘きのふとつぎぬ

(明治三十一年)

をはり田の畑うつ少女こと問はん桃の花さく里いづくぞも

(明治三十一年)

くれなるの裾をうばらに引かれつゝ都少女の木の子狩るらん

(明治三十一年)

撫子の花賣るをとめ撫子の花にぞ似たるなでしをとめ

(明治三十一年)

唐黍を剥ける女よ宿貸せ道に迷へる旅人ぞ吾は

(明治三十一年)

淺草公園

すめらぎのみこのみことのかしこくも見そなはしたる玉乗り女

(明治三十二年)

春 雨

葛飾の小梅の里の小田ぞひに春雨小傘行くは誰が妹

(明治三十三年)

つくり田の牡丹の花を手に持ちて踊りつれたる二むら少女

(同)

くれなるのとばり垂れたる窓の内に薔薇の香満ちてひとり寝る少女

(明治三十三年)

くれなるの薄色匂ふ薔薇の花を折りて手に持ちて香を嗅ぐ少女

(同)

龜井戸の藤のさかりに群れ遊ぶ振袖少女うつくしと見ずや

(同)

妹が著る水色衣の衣裏の薄色見えて夏は來にけり

(同)

人屋にて君がみがきしたばはさみたばにはさまん少女子いづら

(同)

はなたれて人屋の門をいでくれば茶屋の女の小手招きすも

(同)

女らの割籠たづさへつくぐし摘みにと出る春したのしも

(明治三十五年)

季節のをんな

—女を詠める俳句—

1

小娘の團扇つかふや青すだれ  
振袖をしぼりて洗ふ硯哉  
女にも生れて見たき踊哉  
名月や美人の顔の片あかり

春

紅梅や垣をへだてゝ娘同士

秋

辻君のたもとに秋の螢かな  
石女いづなの鬼灯おにとうちぎる哀れなり

新年

元日懸(課題)

初日の出鄰のむすめ白粉未だつけず

春

春の野に女見返る女かな

雲雀野や花嫁鞍にしがみつく

恐ろしき女も出たる花見哉

娘おす膝行車の花見哉

殿方に手をひかれたる花見哉

ちることは禿もしらず夕櫻

小娘のからかささすやちる櫻

わびしらに櫻ちるなり緋の袴

傾城の息酒くさし夕櫻

紅梅や式部納言の話聲

花盛知らぬ男のいだきつく

夏

女房のとかくおくれる田植哉

初産の髪みだしたる暑さ哉

花嫁の笠きて養きて田植哉

夏やせを肌みせぬ妹の思ひ哉

早乙女やとる手かゝる手ひまもなき

早乙女に夏瘦のなきたふとさよ

古白の女人形に題す

汗かゝぬ女の肌の涼しさよ

姉が織り妹が縫ふて更衣  
早乙女の昔をかたれ小傾城  
五月雨や漁婦ぬれて行くかゝへ帯  
蝙蝠や又束髪のまぎれ行く  
時鳥けふは聾の婆々一人  
不破の關桑とる女こととはん

秋

梶の葉を戀のはじめや兄妹  
信州の下女が手打の茶そば哉  
遊女一人ふえぬ日はなし京の秋  
花嫩の白をころがす月夜哉  
月蝕や笠きて出たる白拍子  
小原女の衣ふるへばもみち哉

夕もみち女もまじるうたひ哉

終りの冬

鮭さげて女のはしる師走哉

—自明治十八年至明治二十五年—

(寒山落木 卷一)

2

口紅や四十の顔も松の内  
子を負て子守鞠つく片手業  
藪入や思ひは同じ姉妹  
うつくしき妹をもてり猿まはし

はじめの冬

傾城の泪にやれし紙衣かな  
あかざりやまだ新嫁のきのふけふ



裏窓の雪に顔出す女かな  
はしためが水かけてけり雪佛

春

うらゝかや女つれだつ嵯峨御室  
摘草や京の女の數々は  
雛の日や誰と遊ばん白拍子  
うら若き聲のみ多き茶摘哉  
我庭に歌なき妹の茶摘哉  
屑買の嫁御になるゝ日永哉  
春の夜や灯にそむきたる瘦女  
春の夜や女見返る柳橋  
行く春や胡弓の絲をはづす瞽女  
じだらくに寐たる官女や宵の春

春風や根岸の寮に女客  
春風や女つみ出す越後船  
春風や女酒賣る船の中  
春風や蟹つる女年二八  
春風や皆似た顔の官女達  
文金の合せ鏡や風ひかる  
女一人ふえ二人ふえ春の雨  
春雨や文ひろげの狂女我を見る  
春雨や女乞食の琴の音  
春雨や傘を提げ行く女あり  
夢に見ん遊女もしらず春の雨  
聒がねに誰がなるらん春の月  
春の水女の足にぬるみけり

春の野にうちいでて見たる女哉  
春の山瓢さげ行く女かな  
さゝめくや春の山ふみ女づれ  
花嫁の聲とも聞かじ猫の戀  
石女の春日詣や孕鹿  
鶯は女に似たり松の内  
腰元は藪鶯の在所かな  
夜な夜なの辻君かくす柳哉  
男より女の多し山櫻  
目隠しの女あぶなし山櫻  
小原女の薪にまじる梨の花  
小娘の畑打つ頃や桃の花  
女漕ぐ棚無し小舟海苔の中

振袖をかざして通るあざみ哉  
小娘が足の血に泣く菫かな

夏

鏡見てゐるや遊女の秋近き  
短夜のまことをしるや一夜妻  
傾城にいつはりのなき暑さ哉  
我宿は女ばかりのあつさ哉  
夜も更けぬ妻も寐入りぬ門涼し  
涼しさや目高追はへる女の子  
傾城の娘もちける鶴匠哉  
闇の夜を鶴飼の妻の泣く頃か  
物いへば女なりけり眞菫刈  
さをとめや泥から生えし足の色

菖ふく乞食の女房孕みけり  
傾城や客に買はれて夕涼み

根岸

妻よりは妾の多し門涼み  
家並に娘見せたる浴衣哉  
青簾娘をもたぬ家もなし  
船にたく室の遊女の蚊遣哉  
傾城にとりかくされし扇哉  
足遅きは女なるらん日傘  
夕立や下女干物をかつきつゝ

旅亭

夕立や雨戸くり出す下女の數  
夏の月ほくろの多き女哉

藝啞の娘に向ひけり  
葉櫻や狂女が舞の紅扇  
明寺の筍たけのこぬすむ女かな  
紙燭とつて女案内す小夜牡丹  
傾城の罪をつくるや紅の花  
蓮持て人中行きぬ尼一人  
夕顔に飯くふ女ふたのかな  
細帯の女端居す釣葱

秋

秋の暮女を見れば猶淋し  
一村は女や多き小夜礎  
手をあげて尼の呼びあふ花野哉  
女ゆかし紅葉を散らす烟草盆

茸狩女と知れし木魂哉

冬

行く年を紅粉白粉に京女

麥を蒔く束髮娘京近し

たふとさに寒し神樂の舞少女

煤拂鏡かくされし女哉

徳利提げて巫女歸り行く落葉哉

葱洗ふ浪人の娘瘦せにけり

明治二十六年

(寒山落木 卷二)

3

新年

女つれて東風に吹かれに東山

遣羽子や皆君が代の女ぶり

神國の女を

目の黒い人に生れて手鞠哉

春

女若く馬糞ひろふ春日哉

行春を乗合船の女かな

行春の爪紅落す女かな

うき人よ彼岸参りの薄化粧

武蔵野や畑打つ女帯紅し

振袖を背中に結ぶ沙干哉

馬引で渡る女や春の水

春の野に都見かへる女かな

眞先に女行くなり春の山



鍋提げて梅折る里の女かな  
道狭く梅さげて行く女あり  
大川に女船漕ぐ柳哉  
桃咲くや可愛いと思ふ女あり  
桃咲くや妻になる人誰々そ  
花の山浮世繪の美人來る哉  
畦道に若菜つむ少女竝びけり  
古川や昔女の根芹摘む  
遊女老いて茅花まじりの垣根哉

夏

烏帽子著て汐汲む女裾涼し  
うつくしや京の女の扇折  
夏山や笈おろしたる大女

時鳥月を尋ぬる女かな  
子を負ふて木賊刈る里の女哉  
からげたる赤腰巻や露時雨

秋

つれだつや女商人山紅葉  
裾山や萩咲く中の尼一人  
野菊折つて足洗ふ里の女かな  
稻舟に棹とり馴れぬ女かな  
問へど答へずひとり稻こく女かな

終りの冬

水漬に旅順を語る老女かな  
子を負ふて大根干し居る女かな  
昔寵愛の女住みけり冬木立

桶踏んで冬菜を洗ふ女かな

—明治二十七年—

(寒山落木 卷三)

4

新年

雑煮餅くひなやみたる女かな  
遣羽子に去年の娘見えぬかな

春

のどかさ仁王見て立つ女哉  
春の夜の醜女の顔に更けにける  
辻駕に女乗せたる日永哉  
小櫻といふ遊女を買ひぬ春の暮  
行く春の鐵漿かつけなやむ女哉

人妻の男呼ぶなる汐干哉

赤帯の女野邊行く霞哉

春の雨花擔ひ来る娘かな

春風が吹くとして遊ぶ女かな

春の月芝居の木戸に湧く女

女そゞろ梅折りなやむけしき哉

紅梅や秘藏の娘猫の戀

菜の花や小娘ひとり此大家

夏

罪深き京の女や綺羅の汗

時鳥跣足参りの女かな

菖蒲提げて女行くなり柳橋

撫子や若き女の世すて人

秋

梶の葉に書きなやみたる女哉  
灯をともし女なまめく切籠哉  
稻刈の鎌持つて女見返しぬ

冬

霜やけや娘の指のおそろしき  
めづらしく女に逢ひし枯野哉

明治二十八年

(寒山落木 卷四)

5

春

凍解に木履はいたる女かな  
のどかさや小娘一人一軒家

出女のあくびして居る日永かな

怪談に女まじりて春の宵

春の夜の女も見えぬ都かな

行く春や女載せたるいくさ船

行く春をひとり鼻ひる女かな

女ありく春の砂原下駄を没す

わりなしややぶ入に來て泣く女

出代や包さげたる大女

春風の女吹くなり二月堂

小原女をめぐらしがるや春の風

櫻折る女の綱や雨の中

櫻ばかり女ばかりの上野かな

此里に美女二人あり桃の花

妻をつれ娘をつれて木瓜の花  
茶の花や娘に出あふ田舎道  
道ばたや漁村の娘蓬摘む  
刺繡に倦んで女あくびす藤の花

夏

うたゝねや遊女の膝の明け易き  
早少女に物問ふて居る法師哉  
六十のそれも早少女とこそ申せ  
湯上りや乳房吹かるゝ端涼み  
旅籠屋に下女の名知りぬ五月雨  
夕立に日傘さしたる女かな  
袖の花や琴かきならず醫者の妻  
夕顔や客載せて來る女馬士

夕顔に都なまりの女かな  
夕顔に手洗ひ居る女かな  
夕顔に女湯あみすあからさま  
夕顔の戸叩けば女應と呼ぶ

秋

古妻や背中合せの夜は長き  
聖靈やすこし後から女だち  
麻木焚く女ばかりの哀れなり  
燈籠の門を叩くや女馬士  
相撲取小き妻を持ちてけり  
悪僧の女捉ふる紅葉かな  
朝顔に傾城だちの躰かな  
小娘の萩に隠れて三日の月



夕榮や稻こく嫁の赤き顔

冬

説教は寒いか里の嫁御達

あちら向き古足袋さして居る妻よ

女どもの赤き蕪を引いて居る

森淋し小娘一人落葉搔く

—明治二十九年—

(寒山落木 卷五)

6

春

臘夜の犬を恐るゝ女かな

春風の女凌雲閣に上る

春雨の女花賣蓑を著て

警女達のまくりあげたり春の川

我梅を手折る都の女かな

櫻折つて櫻に狂ふ女かな

梨花白し此頃美女を見る小家

女ばかり土筆摘み居る野は浅し

げんぐに坐して女のを喰ふ

秋

目をぬすみ小鯛ひろふ貧女哉

蜜柑籠に蜜柑山下りて来る女

柿に思ふ奈良の旅籠の下女の顔

野菊持ちし女の童に逢ひぬ鈴鹿越

茸狩の歸らんとする女かな

冬

戸を叩く女の聲や冬籠  
メリヤスの手袋しつゝ下女水を汲む

題アイノ圖

枯芒さすが女に髻はなし

7

新 年

羽子板や十五かしらに皆女  
福引に恥をかきたる女哉  
裾を引く妻の立居や三ケ日

春

摘草や善き衣著たる女の童  
春風の船に酔ふたる女哉

花に酔ふて頭痛すといふ女哉  
女生徒の遊びところや絲櫻  
釵は花見戻りの女哉  
一群の藝妓に出逢ふ花見哉

夏

汗くさき遊女と寐たり狭き花筵  
二階には娘住ませつ青簾  
茶屋女盧生の晝寐起しけり  
蚊の聲に馴れて遊女の眠り哉  
石女の青梅探る袂哉

秋

鬼灯やいまだ楊家の娘ぶり

新年

歌かるた女ばかりの夜は更けぬ

春

春の夜や妻にならうの私話

晝にかきし海苔採り舟の女哉

ふらこゝの遊びに飽きし女哉

人を呼ぶ矢場の女や臘月

春風や嫁を載せたる飾り馬

江の嶋へ女の旅や春の風

百姓の娘うつくし桃の花

海棠に舩の細き美人哉

繪を習ふ繪師か娘や藤の花

秋

稻妻や燈臺番の妻一人

新米や妻に櫛買ふ小百姓

冬

女つれし書生も出たり酉の市

初雪や越後の下女の物語

―自明治三十年至明治三十二年―

(俳句稿 卷一)

新年

歌かるた知らぬ女と並びけり

錢湯を出づる美人や松の内

春

男呼ぶ女の聲や夜朧  
嫁と見え娘と見えて畠打つ

夏

菖蒲湯や男の子つれたる女親  
羅に腰の細さよ京女  
行水や美人住みける裏長屋

10

春

踏青や美人群れたる水の隈

冬

かんじきに馴れたる奥の女かな

11

春

春の野や女四五人辨當持  
紅梅や平安朝の女だち

夏

姫百合や日本の女丈低し

秋

芋蟲や女をおどす悪太郎

年ふけて修業する不幸女へ

女郎花女ながらも一人前

一月明治三十三年至明治三十五年

(俳句稿 卷二)

心の日記（隨想）

薔薇の苔ふくる

○病稍々間あり、杖にすがりて手のひら程の小庭を徘徊す。日うらゝかに照して鳥空を飛ぶ。心よきことはいはん方無し。一二本の小松は緑のびて凌雲の勢をあらはし、一尺許りの薔薇は苔ふくれて一點の朱唇を見る。秋草はわづかに芽を出していまだ萩とも桔梗とも知らぬに一もとの紫羅傘は已に一輪の白花を開く。雨後土未だ乾かぬ處にさゝやかなる蟲のうごめくはこれも命あればなるべし。

萩 桔梗 撫子 など 萌えにけり

一八の一輪白し春の暮

（松羅玉液）

## 上野の花

○上野の花 いかにあらん。春の日和を獨りふすまの中に寝てあれば只ごおくといふ音のみぞ聞ゆる。

寝て聞けば上野の花のさわぎかな

ある日稍々心よきまゝ車に扶け載せられて上野を巡りけるに、綺羅の群衆花の陰に満ちて鬼事に餘念なくあるは鬼事を見てうつゝなし。いかばかりかうれしからん、風船さへ浮きくとして飛びたがる今日此頃。

新阪や向ふに見ゆる花の雲

古宮の櫻咲くなり杉の奥

黒門も摺鉢山も櫻かな

(松羅玉液)

## 向島の花

○向島の花 いかにかあらん。紅雲十里黄塵萬丈の光景眼の前にちら／＼と見えて土手沈むこと三寸三分。

此花に酒千斛とつもりけり

花ちら／＼島田の男酒を飲む

交番やこゝにも一人花の酔

(松羅玉液)

## 春の雨ふる

○春雨 は昨日もふりぬ。又今日もふりぬ。枕邊の俳書小説畫帖など彼を見、此をひろげなどするに果ては何にも飽きてそれもいや、これもいやなり。筆執りては筆をおき墨すりては墨を投げ只々惘然として天井をながむることもうら淋しく春雨の句ども思ひつゞける。

春の雨松三寸の小苗かな

春雨になるや廣野の南風

(松羅玉液)

## 春 淋 し

○春もはや 今日明日と押しつまりぬ。九十の春光を梅よ櫻よとうかれありきて今は其おこたりを悔む人もあらん。永き日の花見にも飽かでおもしろき夜を誰やらと酒酌みかはした。はては胡蝶の夢覺めて借錢に首のまはらぬ人もあらん。われはたゞ六疊の部屋にたれこめてくやむべき程の樂みをも得せず、惜むべき程の春を持たざりき。今日の苦みは昨日の樂みより來り明日の樂みは今日の苦みより起る世の中にさりとて昨日も今日も明日も何を苦みて此世にはながらへたる。あはれ又來ん春はありやなしや。

行く春を徐福がたよりなかりけり

紙あます日記も春のなごりかな

—明治二十九年—

(松羅玉液)

## 人の痛みは何とやら

病床苦痛に堪へずあがきつうめきつ身も世もあらぬ心地なり。傍らに二三の人あり。其内

の一人、人の耳許り見て居るとよつぼど變だよ、など話して笑ふ。我は健かなる人は人の耳など見るものなることを始めて知りぬ。(二十三日) —明治三十四年二月— (墨汁一滴)

## 夏のけはひ

○夏來れり 狭き庭を見れば葵は乳のあたり迄伸び出で青薄はや風を受けて亂れ初めたり。薔薇は赤き枝の若きが只すい／＼と丈高く、赤き葉、赤き刺のうつくしき中に蒼の紅を含みていくつも並びたるなか／＼に開き盡したるよりは見處多し。上野の山は低き垣の上に見えて物古りたる杉木立の間に若葉少し漏れて日に照されたるもすが／＼しく覺ゆ。

夏に入りてげん／＼いまだ衰へず

古杉の間に光る若葉かな

(松羅玉液)

## 言葉の塵

○窮して而して始めて一條の活路を得、始めより窮せざるもの却て死地に陥り易し。

○釣に巧なるものあり、川の寫眞を見て曰く、此川にはきつと鮎が居ると。

○幕府以來の名家固より相當の産あり、而して其の朝飯は味噌汁と香の物の外、又一物を加へず。之を主人に質せば、主人曰く、我も餘りまづい朝飯とは思へど、古來の習慣今更致方もなしと。

○蚊が出て蚊帳がないといふ者あり、曰くランプを十分に明るくして寝よ。(十一日)

—明治三十五年六月—

(病牀六尺)

### 希望つきる時

人の希望は初め漠然として大きく後漸く小さく確實になるならひなり。我病牀に於ける希望は初めより極めて小さく、遠く歩行き得ずともよし、庭の内だに歩行き得ばといひしは四五年前の事なり。其後一二年を経て、歩行き得ずとも立つ事を得ば嬉しからん、と思ひしだに餘りに小さき望かなと人にも言ひて笑ひしが一昨年の夏よりは、立つ事は望まず坐るばかりは病の神も許されたきものぞ、などかこつ程になりぬ。しかも希望の縮小は猶こゝに止まらず。坐

る事はともあれせめては一時間なりとも苦痛無く安らかに臥し得ば如何に嬉しからんとはきのふ今日の我希望なり。小さき望かな、最早我望もこの上は小さくなり得ぬ程の極度にまで達したり。此次の時期は希望の零となる時期なり。希望の零となる時期、釋迦は之を涅槃といひ耶蘇は之を救ひとやいふらん。(三十一日)

—明治三十四年二月—

(墨汁一滴)

### 故郷は母の乳房

世に故郷程こひしきはあらず。花にも月にも喜びにも悲みにも先づ思ひ出でらるゝは故郷なり。故郷は學問を窮め見聞を廣くするの地にあらず、されども故郷には歸りたし。故郷は事業を起し富貴を得るの地にあらず、されども故郷には住みたし。兩親姉妹あるが爲に故郷に歸りたしと思ふもあらん。我は親はらからとも今は故郷にはあねど、猶故郷こそ戀しけれ。都にありて世を厭ふが爲に故郷に住みたしと思ふもあらん。我はさまざまに世を厭ふふしもなくて猶故郷こそこひしけれ。思へば十餘年の昔はやり氣のおさへ難くて單身故郷を出で行かんとこそは勇みしか、いざ首途といふに一點の熱涙は覺えず頬のあたりに流れ來るを見送りの人に見せ



じと顔そむけたる時の苦しさ、何やら胸につかへたる心地なりき。母親の乳房と故郷の土とはなれうきものなめり。

—明治二十八年—

(養菊雜記—故郷)

### 「錢 殞 如 雨」

○役に立たぬつまらぬ事を考へて縁起でも無いから御祓をして汚れをはらふてしまはうと思ふて居ると、箱の底から、前年臺灣土産に貰ふた赤い紙が一束ね出た。紙は幅三寸堅六寸位で支那人の名刺にするのださうだが、それを見ると、ふと支那の家に貼つてある赤紙の事を思ひ出して、その紙へ、めでたい縁起の善い慾ばつたやうな言葉を選んで書きつけた。それを何處へ貼らうかと仰いで室内をながめたが、西側には伊達政宗が羅馬法王にやつた手紙の寫眞版が額になつて掛つて居る。北側には、柱の短冊掛の上に支那の團扇が掛けてあつて、其横に、趙陶齋の書、安部仲丸の歌と仲丸の秘書監になつた事とを書いた幅が掛つて居る。西側が羅馬で北側が支那であつたのは偶然であつた。南側には彫刻師が雞を彫つて居る繪が小さい額になつて居る。東側の押込のある方には眞中の柱に蓑と笠が掛けてあるばかりだからこゝへ貼る事にきめ

た。先づ菅笠の上へ「立春大吉」といふのを貼つて、あとは勝手に貼らせたら、左の鴨居に「辨財天女」「歳徳神」「福如東海」「鶴龜松竹」「壽如南山」右の鴨居に「卯歳男」「大願成就」「錢殞如雨」「百事如意」「吉祥天」「南無三寶」といふ順に貼られた。日本風の薄ツべらな家には此眞赤の紙が調和せんので目立つてことさらに見える。此位目立つたら福の神にも見えぬ事はあるまい。これで福が來ぬなら福の神が悪いのだ。

—明治三十三年一月—

(新年雜記)

### 貧 し き は

○貧しきは 常のことながら月の末は殊に貧しく年の暮は更に貧し。貧の極度は一文も無きことぞと覺えたる書生の内はなか／＼に一文も無きこそ魂落ちつきて心安きこと多けれ。手の内、財布の底盡くあらためて種仕掛も無き空囊の中より達磨二つ三つ取り出すさへいくらかの修行は必要なるに、此頃見習の世帯持がありたけの物はたり取られて猶正月の餅つかんとあせる思ひを鄰の杵の音に驚かさるゝ苦しきよ。病めるは吾れの常、寒ければ殊に惱ましきも猶年々の常ながら病めるが上に病み惱めるが上に惱めること誰れかは思ひよるべき。病魔は勢に乗り五

臟六腑を喰ひ裂きて猶飽き足らず、頭のつむじより足の踵まで透間もあらず攻め寄せく攻め落さんとすれど多年の籠城に馴れたる身は更に驚くべくもあらず。肺、氣を入れず胃、食を容れず足、地を踏む能はず、縦しさらば運を天に任せて褥中に仰ぎ臥し壁上に記したるパラダイス、ロストの一節を讀み下せば悪魔は金の階子に腰掛けて見下しつゝ吾れを嘲るに似たり。口惜しくも腹立たし。貧は一文無しより樂しきは無く病は靜かに寐たるより安きは無し。吾れ徒らに病魔に愚弄せられて分陰を浪費するに忍びんや、年將に暮れんとす、吾子何ぞ起たさると自ら叱し自ら勵み一枝の秃筆を揮つて燈下に文を草せんとすれば壁上悪魔呵々として笑ふ。

行く年を母すこやかに吾病めり

また生きて借錢乞に叱らるゝ

(松蘿玉液)

### 天地無情

何處より來りて何處にか去る。我身の上知らぬ世の人の愚かさ。さりとして罵り騒ぐ哲學者が無理か道理か十人十色の見識、それも奥まで詮じつめれば譯も無き屁理窟の果は不思議分際

落つるぞ是非なき。百代の過客は入道の扇にも止らず。五尺の肉團は九年の坐禪にも猶腐り盡さずと聞けば、何を目的に蝸牛の盧に屈まりて蠢魚と情死せんこと詮なし。浮世を漏れぬ雨風に屋根は破れて月の漏る光は夢路に向上の一路を辿れども、憂きを忘れ草、燻らして唾壺に煙の昇り龍、何の通天の助なるべき。何處か旅路ならん。何處か旅路ならざらん。江天蘆花白うして初雁の一聲。來るとや言はん歸るとや言はん。固より雁に故郷は無きものを。

大隱は市に隠る。心こそ厭へ姿が世をば厭はゞこそ。さりとは凡夫の浅ましく墨染の衣に道心の怠りを勵み、錦欄の袈裟に絹布の昔を忍ぶことの恥かしさよ。況して出家ならぬ高木直人、行脚の姿に身を窺して思はぬ空の富士の根に菅笠の著工合悪く小石まじりの新街道に横ざまになりし草鞋の尻、早くきれたり。何事も猶浮世なりけりと足に任せて都を後に走り出でついさ今より何處にか行かん、月の照る處花の咲く處。見渡せば天地茫茫として山又山、水又水。

(月の都)

### ある日街に出る

今年になつて始めての外出だから嬉しくてたまらない。右左をきよろくと見まはして、見える程のものは一々見逃すまいといふ覺悟である。併しそれがために却て何も彼も見るとか忘れてしまふ。

暗い丈夫さうな門に「質屋」と書いてある。これは昔からいやな感じがする處だ。

竹垣の内に若木の梅があつてそれに豆のやうな實が澤山なつて居るのが車の上から見える。

それが嬉しくてたまらぬ。

狸横町の海棠はもう大抵散つて居た。色の褪せたきたない花が少しばかり葉陰に見える。

仲道の庭櫻は若し咲いて居るかも知れぬと期して居たが、何處にもそんな花は見えぬ。却て其ほとりの大木に栗の花のやうな花の咲いて居たのがはや夏めいて居た。車屋に沿ふて曲つて、美術床屋に沿ふて曲ると、菓子屋、おもちや屋、八百屋、鰻屋、古道具屋、皆變りは無い。去年穴のあいた机をこしらへさせた下手な指物師の店もある。例の爺さんは今しも削りあげた木を老眼にあてゝ覺束ない見やうをして居る。

やつちや場の跡が廣い町になつたのは見るたびに嬉しい。

一明治三十三年七月一

(車上の春光)

### 提燈に月が照る景色

三橋を出ると驚いた。兩側の店は檐のある限り提燈を吊して居る。二階三階の内は二階三階の檐も皆長提燈を透間無く掛けて居るものもある。どうも綺麗だ。何だか愉快でたまらん。車は「揚出し」の前を過ぎて進んで往た。「雁鍋」も「達磨汁粉」も家は提燈に隠れて居る。瓦斯燈もあつて電気燈もあつて、鐵道馬車の灯は赤と緑とがあつて、提燈は兩側に千も萬もあつて、其上から月が照つて居るといふ景色だ。實に綺麗で實に愉快だ。自分は此時五つか六つの子供に返りたいやうな心持がした。そして母に手を引かれて歩行して居る處でありたかつた。そして兩側の提燈に眼を奪はれてあちこちと見廻して居るので度々石につまづいて轉ばうとするのを母に扶けられるといふ事でありたかつた。そして遂には何か買ふてくれとねだりはじめるとうねだりおほせて其邊の菓子屋へはひるといふ事でありたかつた。

一明治三十二年十二月一

(熊手と提燈)

## 心おぼえ

- 伊藤圭助歿す九十餘歳。英國女皇崩す八十餘歳。李鴻章逝く七十餘歳。
- 星亨訴へられ、鳩山和夫訴へられ、島田三郎訴へらる。
- 朝夕負け、荒岩負け、源氏山負け。
- 神田の歳の市に死傷あり。大阪の十日夷に死傷あり。大學第二醫院の火事に死傷あり。
- 背痛み、腎痛み、横腹痛む。(三日)

—明治三十四年二月—

(墨汁一滴)

## 夏の夜の音

時は明治卅二年七月十二日夜、處は上根岸の某邸の溝内の最も奥の家、八畳の間の真中に病の牀を設けて南側の障子明け放せば上野おろしは關の庭を吹いて枕邊の燈火を揺かす。我は横に臥したる體をすこしもたげながら片手に頭をさよへ片手に蚊を打つに餘念なし。

午後八時より九時迄

北側に密接してある臺所では水瓶の水を更ふる音、茶碗、皿を洗ふ音漸く止んで、南側の垣外にある最合井の釣瓶の音まだ止まぬ。

垣の外に集りし子供の鼠花火、音絶えて、南の家の子供は自分の家に歸つた。南東の藻洲氏の家では子供二人で唱歌を謳ふて居る。はては板の間で足拍子取ながら謳ふて居る。

南の家で赤子が泣く。

南へ一町ばかり隔てたる日本鐵道の汽車は衆聲を壓して聳々と通り過ぎた。

螢一ついづこよりか枕もとの硯箱に來てかすかに火をともしり。母は買物にとて坂本へ出で行き給へり。

上野の森に今迄鳴いて居た梟は、はたと啼き絶えた。最合井の邊に足音がとまつて女二人の話は始まつた。一口二口で話が絶えると足音は南の家に這入つた。

例の唱歌は一旦絶えて又始まつたが今度は「支那のチャン／＼坊主は餘ッ程弱いもの」といふ歌に變つた。しばらくして輕業の口上に變つた。同時に二三人が何やらしやべつて居る。終に總笑ひとなつた。

列車の少い汽車が通つた。

午後九時より十時迄

東鄰の家へ、此お屋敷の門番の人が来て、庭へ立ちながら話してすぐ歸つた。

南の家で、窓から外へ痰を吐いた。

誰やら水汲みに來た。

障子を閉さしむ

南の家では、入口の前で、闇に行水する様子だ。

下り列車が通つた。

遠くに澤山の犬が吠える。

體温を閲す、卅八度五分。

行水がすんで、團扇で尻か何か、叩く音がする。

足音がした。南裏の木戸が明いた。

母はちひさき燈籠とみそ萩とを提げて歸り給へり。

今年坂本の町が廣くなつて草市の店が賑かに出た。

など話し給ふ。

汽車通る。やがて單行の汽罐車が通る。

南の家で戸じまりの音がする。

南東の家で戸じまりの音がする。四鄰漸く靜まる。

次の間で麻木を折る音がする。

上野の十時の鐘が聞える。

—明治三十二年七月—

(夏の夜の音)

## 秋の日の想ひ

.....

露草が小川の水際に茂つて居て一枝の花が水に浸されてよごれて居るのも面白い。此廣瀾な眺望に見とれて日頃の憂鬱は全く忘れてしまふたやうである。毎日のやうに此處へ來ていつも變らぬ景色を見たのであるがそれが今日は殊に愉快に感ぜられる。余は成るべくゆるやかに歩

行きながら道ばたの草花の種類を検査して居る。道ばたの草花が無いやうになると三河島の入口で、何といふ木か知らぬ大木がお宮の前にあつてそれに繪馬のやうな板をつりさげて鐵砲を二挺交叉した畫がかいてある。それからまばらにある家の間を通りぬけて、道祖神か何か五つも六つも竝んで居る處から曲ると狭いきたない泥溝があつて燕子花が一輪咲いて居る、返り咲でもあらう。それから曲りくねつた道をあちこちと行く内に村を抜け出で又野へ出る。此邊は四方見渡しても人を見ないやうに靜かな處だ。余の足音を聞きつけてか百羽ばかりの稻雀は羽風を立て、向ふの木立へ隠れてしまふた。

「いくさがいよく起つたと聞いた時にはさすがに平和に馴れた耳を驚かしたよ。若し日本が亡びてしまひはすまいか。明日にも東京へ敵兵が遣入つて来て我々も何處かへ逃げねばならぬやうになりはすまいか。其時には書物を置いて行くのは惜いがどうしたら善いか、などといふ取越苦勞もした。併し牙山の戦に我兵大勝利を得たといふ報知が新聞に吹聴せられてからは段々心丈夫になつて來た。殊に平壤が陥落したといふ從軍記者の報知が詳しく出て居るのを見ては我ながら勇氣凜々として來る。しかも其從軍記者の中に自分

等と同社の小田大行もあると思ふと羨ましくてたまらん。曲木も小間も皆平壤の戦列に加はつたといふ事だ。大本營は廣島に移る。黄海では大勝を得る。臨時議會は廣島に召集せられる。第一師團はいよく旅順方面に向ふといふので本山は從軍の爲に出て行つた。大野迄も廣島へ出掛けた。此頃の新聞社の淋しさは實に堪へられない。

いつの間にか野道の幅が廣くて草が生えて人の通らぬ處へ來たので余は其の草の上へころりと仰向に寐ころんだ。いつでもこゝへ來るといつでも寐ころぶきまりになつて居るのだ。

文學に志す吾身でなかつたらどうかして自分も從軍して居るに違ひない。新聞社に居ながら文學欄を擔當して居るがために從軍が出来ぬといふのは實に情無い。文學者として千歳一遇の此戦争を歌ふのも固より其職務の如き者であるけれど他の人が從軍するといふなら自分が其を争ふ迄の權利は無い。且つは自分の病身であるために自ら進んで從軍せうともいひかねて居る。尤も自分では病身かまひはせんが記者としての職務を盡す事が出来んでは社へ對して氣の毒だから終始さやうな事をおくびにも出さないやうにして居る。それが實につらい。併しどうかして從軍しなければ男に生れた甲斐がない。

一かたまりの雲は天の一方からはびこつて来て今しも吾顔の眞上にさしかゝつた。  
小田等の一行が平壤のいくさを見るために山の半腹に日覆ひをしながら其の陰に這入つて  
往たら其日覆ひを目あてに敵が大砲を撃つたさうだ。すると大砲の丸が二十間程前に落ち  
て土煙が立つたさうだ。  
余は寐ころびながら首筋がぞく／＼と寒く感じた。雲は段々廣がつて青空は處々に透いて見  
える程になつた。

實に壯快だ。考へてもたまらない。

突然と半身を起して起き直ると、今迄膝の上で平和を樂んで居た二つの蝨はつがふたまゝで  
ファイと向ふの草の上へ飛んで落ちた。何心なく手を伸して其蝨をつかまへた其時、隠々として  
遠くかすかに午砲は聞えた。空を仰ぐとさしもの秋日和が一面の薄曇りとなつて居る。最早出  
社の時刻となつたのだからいやでも出社しなければならぬと思ふて立上りさまに手をひろげる  
と、二つの蝨は別れ／＼になつて一つは北へ一つは南へ飛んで往た、吾手のひらに黒い血を残  
して。

—明治三十三年三月—

(我が病)

### 苦痛の記録

九月十四日 曇

午前二時頃目さめ腹いたし家人を呼び起して便通あり腹痛いよく／＼烈しく苦痛堪へ難し此間  
下痢水瀉三度許あり絶叫號泣。

鄰家の行山醫を頼まんと行きしに旅行中の由電話を借りて宮本醫を呼ぶ。

吐アリ

夜明稍々靜マル柳醫來ル散薬ト水薬トノム疲勞烈シ

氷片ヲカム或ハ葡萄酒ニ入レテ

牛乳 葛湯 ソツプ 飴湯

—明治三十五年—

(仰臥漫録)

旅 三 昧

旅の古藁

○旅行 ともし火は壁上の詩歌を照して雨戸くる音も絶えたるころ、家居まばらなる鄰近所は静まりかへりて時々打ち笑ふ聲かすかに聞ゆ。何とは無く思ひに沈みたる眼を開けば柱に懸けし古藁に思はず六年の昔ぞ偲ばれける。千葉より小湊に出でんと多喜のほとりに春雨に逢ひて宿とらんも面白からず、さりとして菅笠一蓋には凌ぎかねて路の邊の小店にて求めたる此藁、肩にうちかけたる時始めて行脚のたましひを入れて

春雨のわれ藁著たり笠著たり

水戸旅行しては藤代に宿りしつぐの朝より降りそめて



はたごやの門を出づれば春の雨  
歸り路は水戸を出んとする時大雨盆を傾くるが如し。

雨だら／＼餘寒を降つて落しけり

昨年は金州の舍營に暴風雨に逢ひて飯たく烟に二日の間いぶされけるも今は話の種なり。

瓦山や春雨まじり風吹く

—明治二十九年四月二十七日—

(松蘿玉液)

### 秋風の旅

汽笛一聲京城を後にして五十三亭一日に見盡すとも水村山郭の絶風光は雲煙過眼よりも脆く  
寫眞屋の看板に名所古跡を見るよりも猶はかなく一瞥の後また跡かたを留めず。誰かはこれを  
指して旅といふ。かゝる旅は夢と異なるなきなり。出づるに車あり食ふに肉あり。手を蔽けば  
盃酒忽焉として前に出で財布を蔽けば美人嫵然として後に現る。誰かはこれを指して客舎とい  
ふ。かゝる客舎は公共の別荘めきていとうるさし。幾里の登り坂を草鞋のあら緒にくはれて見  
知らぬ順禮の介抱に他生の縁を感じ馬子に叱られ駕籠舁に嘲られながらぶらり／＼と急がぬ旅

路に白雲を踏み草花を摘む。實にやもののははれはこれよりぞ知るべき。はた十錢のはたごに  
六部道者と合ひ宿の寢言は熟眠を驚かし、小石に似たる飯、馬の尿に似たる澁茶にひもじ腹を  
こやして一枚の木の葉蒲團に終夜の寒さを忍ぶ。いづれか風流の極意ならざる。われ浮世の旅  
の首途してよりこゝに二十五年、南海の故郷をさまよひ出でしよりこゝに十年、東都の假住居  
を見すてしよりこゝに十日、身は今旅に在りながら風雲の念ひ猶已み難く頻りに道祖神にさわ  
がれて霖雨の晴雨をうかゞひ草鞋よ脚半よと身をつくるひつゝ一個の袱包を浮世のかたみに擔  
ふて飄然と大磯の客舎を出でたる後は天下は股の下杖一本が命なり。

旅の旅その又旅の秋の風

—明治二十五年十月—

(旅の旅の旅)

### 青田の風の八百里

松島の風に吹かれてひとへ物

一句を留別として上野停車場に到る。折ふし來合せたる飄亭一人に送らる。我れ彼が送らん  
事を期せず彼亦我を送らんとて來りしにも非ざるべし。まことや鐵道の線は地皮を縫ひ電信の

網は空中に張るの今日椎の葉草の枕は空しく旅路の枕詞まくらことばに残りて和歌の嘘とはなりけり。されば行く者悲ます送る者歎かず。旅人は羨まれて留まる者は自ら恨む。奥羽北越の遠きは昔の書にいひふるして今は近きたとへにや取らん。

みちのくへ涼みに行くや下駄はいて

など戯る。汽車根岸を過ぐれば左右の窓に見せたる平田渺々として遙かに心行くさまなり。

武蔵野や青田の風の八百里

宙を蹈む人や青田の水車

宇都宮の知る人がりおとづれて一夜の宿を請ふ。驟雨瀧の如く灑たぎて神鳴りおどろくしう今にも此家に落ちんかとはばかり思はれて恐ろしさいはん方なし。

夕立や殺生石のあたりより

二十日汽車宇都宮を發す。即景。

田から田へうれしさうなる水の音

名に聞えし那須野を過ぐるに見渡す限り夏草生ひ茂りてたま〜木ありとも長三尺には足ら

ざるべし、唯とところ〜に菖蒲瞿麥のやさしう咲き出でたるは何を力にかといと心もとなきに、

下野のなすの〜原の草むらにおほつかなしや撫子の花  
草しげみなすの〜原の道たえてなでしこ咲けり人も通はず

—明治二十六年七月八月—

(はて知らずの記)

### 舟中望明石城

舟漸ク進ム。兩傍ノ櫂楫一時ニ皆搖ク。當前見ル所ノ小嶋悉ク飛ンデ遙カニ後ニアリ。雲烟水波ノ間ニ碁布ス、唯岸行キ山走ルヲ見テ舟ノ移ルヲ覺エズ。忽チ播山ノ海ト相接スル處、其間一平地ヲ出ス、荊扉棘籬岸ニ傍フテ一村落ヲ爲ス。正ニ麩麥ノ熟スルニ逢フ。村中ノ老女幼婦悉ク出テ穂ヲ打ツ。以テ其實ヲ墜スナリ。我郷ノ挾ンデ以テ之ル引ク者ト殊ナレリ。將ニ明石ニ近ヅカントスルヤ、舟中ノ乗客皆爭フテ窓ヲ占メ、恰モ之ヲ領シテ他人ノ之ヲ奪フヲ恐ル、ガ如シ。殆ド餘窓ナシ舟漸ク岬端ヲ過グルヤ、忽チ明石城ヲ海霧氤氳ノ間ニ望ム。益々之ニ

近クヤ、初メテ判然十里深林ノ中松樹ノ鬱茂シテ以テ高ク、其中央ニ數多ノ城樓ヲ現スヲ見ル。其絶景ノ佳ナル、固ヨリ余ノ賞揚ヲ待タズト雖モ、余ハ明月ノ此林頭ニ掛テ樓閣ヲ照スヲ見ザルヲ恨ムノミ。乗客數人此處ヨリ上陸セシ者アリ。好景看テ未ダ盡キズ、忽チ舞子灣ニ至ル。一帶ノ松樹岸上ニ羅列シ、綠葉白沙ト相照映ス。其間或ハ旅客ノ車ヲ飛バヌヲ見ル。又小艇ノ頻リニ其前ニ往復スルアリ。平生渴望ノ想ヒ、初メテ今日氷解スルヲ得タリ。

—明治十六年—

(東海紀行)

## 大陸へ渡る

四月十日の朝晴れて心よきに疾く車に上れば日南、大我、南八の諸氏吾を送りて宇品に來道すがらの櫻花桃花紅白に亂れて風流ならぬ旅路さすがに心残るふしなきにもあらねど、たび思ひ定めたる身のたとひ銃把る武士ならぬとも再び故國の春に逢はん事の覺束なければ行かば我れ筆の花散る處まで出陣や櫻見ながら宇品まで

人馬雜鬧の中をくゞりぬけて水上警察署の裏手に入る。こゝは舢舨に乗る處なり。馬一頭さへ大船迄運ぶ事の容易ならぬを幾十頭となく送り盡して後我等も海城丸といふに乗り移りぬ。やごとなき貴人の御召船と聞えければ船體山の如く客室など夥しう列りたるさま更に海の上に浮びたるものとは見えぬ。我等は舳の方甲板の下に棚を釣りたる處に導かれたり。辛じて棚の上に座を定む。座狭く兵士と共に並べり。頭は頭に接し肘は肘に觸れ立てば首を俛し寝ぬれば脚を屈む。五尺の身を二尺四方に縮めて手荷物陰に息を殺せども猶恐ろしき事ども多かり。我室の向ひには鐵網を張りて中に牛肉野菜など總て食料を貯ふ。其傍に階子あり、之を下れば馬厩にして輸卒馬卒等は馬と共に起臥せりとぞ。故郷を離れて萬里の天涯に命を捨てん身のあはれ悲しきはあながちに彈丸のみにはあらずかし。

午後二時に乗りて六時頃に出帆せり。船大に波平なれば船は動くとも覺えず。

十一日、夢早く覺む。甲板に上れば有明の月明らかに兩岸の山彷彿雲烟に似たり。やうく下の關の海峡近くなりけん、中國の山九州の山と相望みて幾個の大砲は兩眼鏡の中に現れ來り其うしろには船舶集まり家居重なり並ぶ處高樓の山に聳えたるはそれかとばかりに船ははや

玄海灘の波を蹴つて船にさはる嶋山もなし。今日はそよと吹く風も無く空を打つ波も立たねばさすがの荒海も疊の上に異ならず。午後二時頃對馬を右に見て過ぐ。顧れば寸青早く天際に没して眼達する處碧空の蒼海に接するを見るのみ。幸に男と生れて桑弧蓬矢四方の志勃々禁ずる能はず、今纔かに日本の地を離る、此時の愉快之を他人に語るべからず。

日本のほつちり見ゆる霞かな

十二日 十時頃一小嶋を過ぐ。今日も亦大陸を見ず。只々白鷗の幾羽ともなく波に沿ふて低く飛び廻るいとどけし。

春の海鷗が浮いておもしろや

十五日 朝十時頃柳樹屯に上る。快き事いはん方なし。棧橋に兵站部の荷物運び居る支那人の百人餘りも群れたる中を推し分けて行くに、日本人と見れば路を譲り殊に軍服を着たる我士官に逢へば驚きあわてゝ兩側に開きたる、譽むる人は淳朴と謂ひ譏る人は意氣地無しと謂ひけん。棧橋を渡りて右に兵站部あり。左に折れて金州へと志し戦後の破屋を見つゝ一町許りに

してはや村を外れたり。家も壁も皆石もて積み屋根は多く瓦にて葺き或は藁めきたるを用ゐたるもあり。郊外に凸凹形の壁あり、兵營なりとぞ。門側の壁二三間許り白堊にて塗り其の上には獅子めきたる動物を畫き色彩を施したり。山も畑も道も家も皆赭赤色を現したる中に獨り此畫の調子外れて色濃きを異なりと評しながら行けば、大道一路多少の高低あれど眼に障る者なければ行先は五町も十町も見え渡りて織るが如き往來は七分通り日本人なり。靴痕車轍路かと思れば麥畑の中を横ぎり平野と見れば田圃皆山腹にあり。山嶺低くして山脚長きがためなり。

大國の山皆低き霞かな

—明治二十八年—

(陣中日記)

## 日本が見える

明治廿八年五月大連灣より歸りの船の中で、何だか勞れたやうであつたから下等室で寝て居たらば、蟻が居る、早く来いと我名を呼ぶ者があるので、はね起きて急ぎ甲板へ上つた。甲板に上り著くと同時に痰が出たから船端の水の流れで居る處へ何心なく吐くと痰では無かつた、

血であつた。それに驚いて、饅を一見見るや否や階子を下りて来て、自分の行李から用意の薬を取り出し、それを袋のまゝで著て居る外套のカクシへ押し込んで、さうして自分の座に歸つて靜かに寝て居た。自分の座といふのは自分が足を伸ばして寝るだけの廣さで、同業の新聞記者が十一人頭を並べて居る。自分等の頭の上は假の棧敷で、そこには大尉以下の人が二三十人、いつも大聲で戦の話か何かして居る。其棧敷といふのは固より低いもので、下に居る自分等がやう／＼坐れる位のものだから、呼吸器の病に罹つて居る自分は非常に陰氣に窮屈に感ぜられる。血を咯く事よりも此天井の低い事が一番いやであつた。此船には醫者は一人居たがコレラの薬の外は無いさうだ。固より病人の手あてなどしてくれる船では無いから、時々カクシの薬を引き出しては獨り吞んで見るけれど、血はやはりとまらぬ。もつとも著物は洋服一枚著たきりで日本服などは無い。外套も引つかけたまゝで寝て居るのである。航海中の無聊は誰も知つて居るが、自分のは無聊に心配が加はつて居るので、只早く日本へ著けば善いと思ふばかりで、永き夜の暮し方に困つた。時々上の棧敷で茶をこぼす、それが板の隙間から漏りて下に寝て居る人の頭の邊へボチ／＼と落ちて来る、下の人が大きな聲で、何かこぼれますよ、と怒

つたやうにいふ、上の人が、ア、さうですか失敬々々、などいふ。こんな問答でもあると其間だけ氣が紛れて居るが、そんな事も度々は無い。退屈の餘り凱旋七絶が出来たので、上の棧敷の板裏へ書きつけて見たが、手はだるし、胸は苦し、遂に結局だけ書かすにしまつた。その内にも船はとまつて居るのでもないから其次の日であつたか又次の日であつたのか午前か日本の見えるといふ處迄来た。日本が見える、青い山が見える、といふ喜ばしげな聲は處々で人々の口より聞えた。寝て居る自分も此聲を聞いて思はずほゝ笑んだ。午後には馬關にはひつた。此時室内を見まはして見ると、五六十人も居る廣い室内に残つて居る者は自分一人であつた。自分も非常に嬉しかつたから、そろ／＼と甲板へ出た。甲板は人だらけだ。前には九州の青い山が手の届く程近くにある。其山の緑が美しいと來たら、今迄兀山ばかり見て居た目には、日本の山は綠青で塗つたのかと思はれた。

—明治三十二年十二月—

(病)

## 總武めぐり

鐵道は風雅の敵ながら新しき鐵道に依りて發句枕を探るこそ興あらめと二人して朝疾く出で

立つ、本所の割下水にて即景。

染汁の紫こぼる小川かな

橋を二つ渡りて小石敷きたる道を曲り停車場に著く。本所の町はづれ早や少しく都離れて原の中にかたばかりの家新しく、場内の人まばらに田舎めきたるが多し。建物は廣からねど二町四方の構内には溝あり沼あり原あり叢あり。停車場の前の廣場を残して向ふは沼田の中に一條の鐵軌低き柵に沿ひ汽罐車の車輪まであらはに往來する様などむくつけきが中々にをかし。

汽車道の此頃出來し枯野かな

いと古代めきたる老嫗の若人に向ひて作右衛門は此頃旅順より消息せしが別に變ることも侍らずぞといふなる。今ははや旅順に居らずと聞ゆるに行先は何處とも得知らずなど説きけるを聞くに昔は鴨綠江に水かはんと言ひ、長白山に旗を翻さんといふこと空しく詩人の言葉に残りて夢だにも容易くは通はぬ遠きあたりとこそ思ひしが、今は一字不通の匹夫匹婦も旅順平壤を鄰のやうに覺えて蝦夷よりも琉球よりも近き心地ぞすなる。

水洩に旅順を語る老女かな

發車の時刻も來れど人の騒ぐけしきも無し。やう／＼に鐸の聲よそ／＼しく響きて汽車に上る。出口にて切符を切るの煩ひなし。列車は一より他へ思ふまゝに移るべくしたる、こは西の國には長き旅路の汽車に用ふるとぞ。切符も車の中にて切るなり。車は歩む如く動き初めぬ。漸く疾くなりて漸く搖る。鐵道馬車に乗りたらん如し。家次第にまばらに野開きて木立ところ／＼に枯れたり。朝晴の景色心地よく鴻の臺を左に眺めて車は轉じ江戸川の鐵橋を渡りて市川に著きぬ。

海見えて白帆遠く右に見ゆる烟突の高きは行徳にやあらん。左に見ゆる蘆のならばは船橋なるべし。

朝霜や屋根のつゞきの安房の海

船橋を後にして千葉に著けば此處にて車を下る者多し、次の停車場を四つ街道となん呼べる。

棒杭や四つ街道の冬木立

やがて佐倉なり。汽車此處にて盡く。此道にては總て驛夫の驛の名を呼ぶ者無し。停車場よ

り佐倉の町迄野道二三町許りなり。新道の泥深き兩側に茶店など總て新し。

藁掛けて風妨ぐなり冬構

佐倉の町は平野の中に一段高き處なりと見るに、

霜枯の佐倉見上ぐる野道かな

木陰寒き坂を上りて左は士族町ならん、右に折れて通り町に出づ。一時間許り前に都を見た  
る眼には何もかも淋しき心地す。町を少し入りて清國捕虜廠舎と書きたる門見ゆ。前には兵士  
劍を把つて護り門内に青竹の矢來を繞らして藁ぶきの家立てり。海鄰寺といふ寺なりとぞ。萬  
里の天外に來りて神州の粟を喰ふ彼等の心の中こそ推測られて哀れなれ。

かゆといふ物をすゝりて冬籠り

坂上より印旛沼を見るべし、坂を下れば堀あり堀の内は昔の城にて今の營所なりとか。

常磐木や冬されまざる城の跡

古沼の境もなしに氷かな

もとの道より引き返して停車場に歸る途に何處の花嫁か馬に乗りて親父とおぼしき人の後よ

り隨ひ行くに逢ふ。

馬に乗る嫁入見たり年の暮

次の汽車にて本所に著きぬ。

冬の日の暮れんとすなり八つ下り

—明治二十七年十二月— (總武鐵道)

### 紅葉を見んとて

春の花は見るが野暮なり、秋の紅葉は見ぬが野暮なりと獨り諺をこしらへて其言ひわけに今  
年は日光の紅葉狩にと思ひ付きぬ。先づ鳴雪翁をおとづれてしかくのよしをいへば翁病の床  
より飛び起きて我も行かんと勇み給ふ。さらば思ひ立つ日を吉日として上野より汽車を驅り宇  
都宮に一泊せし日は朝來の大雨盆を傾けていつ晴るべしとも知らぬに何が吉日ぞ。こゝはいく  
さの跡とてはたごやはまだ何となく騒がしきに強ひて一夜の憐を請ふて木枕の痕を頭にぞ殘し  
ける。

木枕に惟然泣く夜の長さかな

翁は腹痛みて終夜眠り給はざりしとて曉に余を呼び醒まし

若人をゆり起したる夜長かな

鳴 雪

など戯れ給ふ。一番の汽車にて日光に行く。空は一面に曇りたれど雨は降らず。東の方地平線  
上は一筋の薄明りこそ唯一の頼みなりけれ。車上にて、

露吹くや小藪の中の芋畑

鳴 雪

と詠み出でられたる雅淡にして幽趣あり。元祿以後の作とは見えす。日光町に著きたる頃は一  
天晴れ渡りて朝日は小倉山の薄紅葉に映じ出だせるにうれしく、

二荒や紅葉々々の山かつら

翁は下駄を捨て、何十年目の草鞋をはき試み東海道の昔をしのび給ふけしきなり。

先生の草鞋も見たり紅葉狩

おどけたる句に興を催しつゝ大谷川を渡り含満を左に見大日堂を右に見て行くに山々の紅葉  
薄く濃く打ち重なり其間の谷底を一水蜿蜒として蛇行斗折するさま錦繡帳裡に白龍を躍らすか  
如し。一步一步山幽にして景更に奇なり。かくては華嚴の風光は如何ばかりならんと云へば翁

も頷き給ふ。露傍に一本の杖を求めて

日光は杖にする木も紅葉かな

明治二十五年十一月

(日光の紅葉)

### 覆盆子林と牛の群

明治二十六年の夏から秋へかけて奥羽行脚を試みた時に、酒田から北に向つて海岸を一直線  
に八朗湖迄来た。それから引きかへして、秋田から横手へと志した。其途中で大曲で一泊し  
て、六郷を通り過ぎた時に、道の左に平和街道へ出る近道が出来たといふ事が棒杭に書てあつ  
た。近道が出来たのなら横手へ廻る必要もないから、此近道を行つて見ようと思ふて、左へ  
這入て行つたところが、昔からの街道で無いのだから晝飯を食ふ處も無いのには閉口した。路  
傍の茶店を一軒見つけ出して怪しい晝飯を済まして、それから奥へ進んで行く所がだんだん山  
が近くなる程村も淋しくなる、心細い様ではあるが又なつかしい心持もした。山路にかゝつて  
來ると路は思ひの外によい路で、あまり林など無いから麓村などを見下して晴れ晴れとして  
よかつた。併し人の通らぬ處と見えて旅人にも會はねば木樵にも遇はぬ。もとより茶店が一軒



あるわけでもない。頂上近く登つたと思ふ時分に向ふを見ると、向ふは皆自分の居る處より遙に高い山がめぐつてをる。自分の居る山と向ふの山との谷を見ると、何町あるかもわからぬと思ふ程下へ深く見える。其大きな谷あひには森もなく、畑もなく、家もなく、唯綺麗な谷あひであつた。それから山の脊に添ふて曲りくねつた路を歩むともなく歩んでゐると、遙の谷底の極平たい地面があつて、其處に澤山點を打つた様なものが見える。何ともわからぬので不思議に堪へなかつた。だん／＼歩いてゐる内に、路が下つてゐたと見え、曲り角に來た時にふと下を見下すと、さきに點を打つた様に見えたのは牛であるといふ事がわかる迄に近づいてゐた。愈々不思議になつた。牛は四五十頭もゐるであらうと思はれたが、人も家も少しも見えぬのである。それから又暫く歩いてゐると、路傍の荊棘トゲの中がさ／＼といふ音がしたので、余は驚いた。見ると牛であつた。頭の上の方の崖でもがさ／＼といふ、其處にも牛がゐるのである。向ふの方が又がさ／＼といふので牛かと思ふて見ると今度は人であつた。始て牛飼の居る事がわかつた。崖の下を見ると牛の群がつてをる例の平地はすぐ目の前に迄近づいて來て居たのに驚いた。余の位地は非常に下つて來たのである。其處等の叢くさむらにも路にも幾つともなく牛

が群れて居るので、余は少し當惑したが、幸に牛の方で逃げてくれるので通行には邪魔にならなかつた。それから又同じ様な山路を二三町も行った頃であつたと思ふ、突然左側の崖の上に木いちごの林を見つけ出したのである。あるも／＼四五間の間は透間もなき、いちごの茂りで、しかも猿が馬場で見た様な瘠いちごではなかつた。嬉しさはいふ迄もないので、餓鬼の様に食ふた。食ふても／＼盡きる事ではない。時々後ろの方から牛が襲ふてきやしまいかと恐れて後振り向いて見ては又一散に食ひ入つた。もとより厭く事を知らぬ余であるけれども、日の暮れかゝつたのに驚いていちご林を見棄てた。大急ぎに山を下り乍ら、遙かの木の間を見下すと、麓の村に夕日の残つてをるのが晝の如く見えた。あそこいら迄はまだ中々遠いことであらうと思はれて心細かつた。

一 明治三十四年三月、四月

(くだもの)

### 仰臥の旅愁

九月十九日 晴

便 通

朝飯 粥三碗 佃煮 奈良漬

午飯 冷飯三碗 鯉魚ノサシミ 味噌汁 薩摩芋 佃煮 奈良漬 梨一ツ 葡萄一房

間食 牛乳五勺 ココア入 菓子パン 鹽煎餅 飴一ツ 澁茶

便通及纏帯取換

晩飯 粥三碗 泥鰌鍋 キヤベツ ポテトー 奈良漬 梅干 梨一ツ

ツク、ポウシ猶啼ク ○追込ノ小鳥啼ク ○向ノ子供啼ク ○ドコヤラノ汽鳴笛ル(午時

ノ景)

自分ガ旅行シタノハ書生時代デアツタノデ旅行トイヘバ獨リ淋シク歩行イテ宿屋デ獨リ淋シク寐ルモノヂヤト思フテ居ル。ソレダカラ到ル處デ歡迎セラレテ御馳走ニナルナドトイフ旅行記ヲ見ルト美マシイノ妬マシイノテ、

奥羽行脚ノトキ鳥海山ノ横ノ方ノ何トカイフ處デアツタガ海岸ノ松原ニアル一軒家ニトマツタコトガアル一日熱イ路ヲ歩行イテ來タノデカラダハクタビレキツテ居ル此松原へ來タトキニハ鳥海山ノ頂ニ僅ニ夕日ガ残ツテ居ル時分ダカラ迎モ次ノ驛迄行ク勇氣ハナイ止ムヲ得ズ此怪

シイ一軒家ニ飛ビ込ンダ勿論一軒家トイフテモ旅人宿ノ看板ハ掛ケテアツタノデキタナイ家ナガラ二階建ニナツテ居ル、併シコ、ニ一軒家ガアツテソレガ旅人宿ヲ營業トシテ居ルトイフニ至ツテハドウシテモ不思議トイハザルヲ得ナイ安達ケ原ノ鬼ノスミカカ武藏野ノ石ノ枕デナイ處ガ博突宿ト淫賣宿ト兼ネタ處位デハアラウト想像セラレタ自分ガコ、へ泊ルニツイテ懸念ニ堪ヘナカツタノハソソナコトデハナイ食物ノコトデアツタ連日ノ旅ニカラダハ弱ツテキルシ今日ハ殊ニ路端へ倒レル程ニ疲レテ居ルノデアラカラ夕飯ダケハ少シウマイ者ガ食ヒタイトイフ注文ガアルノデ其注文ハ迎モ此宿屋デカナヘラレヌトイフコトデアツタケレドモモウ一步モ行ケヌカラソソナコトハアキラメルトシテ泊ルコトニシタ固ヨリ門モ垣モ何モナイ家ノ横ニ廻ツテトメテクダサイトイフタガ客ラシイ者ハ居ナイヤウダカラ自分モ屹度コトワラレルデアラウト思フタ、處ガ意外ニモアガレトイフコトデアツタ草鞋ヲ解イテ街道ニ臨ンダ方ノ二階ノ一室ヲ占メタ鳥海山ハ窓ニ當ツテキルソコデ足投げ出シテ今日ノ草臥ヲイタハリナガラツクマ、此家ノ形勢ヲ見ルニ別ニ怪ムベキコトモナイ十三四ノ少女ト三十位ノ女ト二人居ルガ極メテキタナイ風ツキデ白粉ナドハチツトモ無イサウシテ客ハ自分一人デアアル、ナドト考ヘテ居ルト臆ガ

來夕驚イタ醉<sup>サカ</sup>牡<sup>ウシ</sup>ガアル椀ノ蓋ヲ取ルトコレモ牡蠣<sup>カキ</sup>ダウマイ、、非常ニウマイ新シイ牡蠣<sup>カキ</sup>ダ  
實ニ思ヒガケナイ一軒家ノ御馳走デアツク歡迎セラレナイ旅ニモ這<sup>この</sup>種<sup>しゆ</sup>ノ興味ハアル

長塚ヨリ鴨<sup>シヤ</sup>三羽小包ニテ送ル由ノ報來ル其末ニ

昨今秋もやうくけしき立申候百舌<sup>もず</sup>も鳴き出し候<sup>ひざ</sup>椋<sup>ヒナ</sup>どりもわたり申候蕎麥の花もそろく

咲出し候田の出來は申分なく秋蠶も珍<sup>めづ</sup>しき當<sup>あた</sup>りに候

トアリ田舎ノ趣見ルガ如シ一寸往テ見タイ

母ハ稻ノ一穗<sup>ひと</sup>ヲ枕元ノ疊ノヘリニサシタ

默然ト絲瓜ノサガル庭ノ秋

夕顔ノ愚ニ及バザルフクベカナ

日<sup>ひ</sup>掩<sup>おさ</sup>柵<sup>さく</sup>絲瓜ノ蔓ノ這ヒ足ラズ

美人ノ團扇持チタル園

絹團扇ソレサヘ秋トナリニケリ

夕飯後鴨ノ小包到着三羽一ク、リニシテアリ

淋シサノ三羽減リケリ鴨ノ秋

家賃クラベ

虚子(九段上)十六圓 瓢亭(番町)九圓 碧梧桐(猿樂町)七圓五十錢 四方太(淺嘉町)五圓

十五錢 鼠骨約軒同居(上野涼泉院)二圓五十錢。

吾盧(上根岸篤横町)六圓五十錢

ホト、ギス事務所四圓五十錢 把栗(大久保)四圓 秀眞(本所綠町)四圓(疊建具ナシ)

自分ハ一ツノ梅干ヲ二度ニモ三度ニモ食フ、ソレデモマダ捨テルノガ惜シイ梅干ノ核<sup>たね</sup>ハ幾度  
吸ハプツテモ猶酸味ヲ帯ビテ居ルソレヲハキダメニ捨テ、シマフトイフノガ如何ニモ惜シクテ  
タマラヌ

貴人ノ膳ナドニハ必ズ無數ノ殘物ガアツテアタラ掃溜ニ捨テラル、ニ違ヒナイ肴ノ骨ニハ肉  
ガ澤山ツイテキルデアラウ味噌汁トカ吸物トカイフモノモ皆迄ハ吸ヒ盡シテナイデアラウ斯ウ  
イフ者コソ眞ニ天物ヲ暴何トカスル者ト謂フベシダ之ヲ彼孤兒院トカ養育院トカニ寄附シテ喰  
ハスヤウニシタラ善イダラウ自分ノ内デモ牛乳ヲ捨テルコトガ度々アルノドイツデモ之ヲ乳ノ

ナイ孤兒ニ吞マセタラト思フケレド仕方ガナイ何カスウイフ處へ連絡ヲツケテ過ヲ以テ不足ヲ補フヤウニシタイモノダ

兵營ヤ學校ノ殘飯ハ貧民ノ生命デアルトイフカラ家々ノ殘飯モ集メテ廻ルワケニ行カナイダラウカ。サウ思フト犬ヤ猫ヲ飼フテ牛肉ヤ鱈節ヲヤルナドハ出來タコトデハナイ小鳥ニ粟ヲヤルサヘ無益ナ感ジガスル

官内省ノ觀櫻ノ御宴ナドガ雨ノタメヤミニナツタトイフヤウナ場合ニハ用意シテアツタ御馳走ハ養育院ノヤウナ處ヘ下サルトイフコトデアル

松山デ何ガシガ孤兒院ノヤウナモノヲ開イタラ若イ女學生ガ饅頭一袋持ツテ來テ名モ言ハズニ歸ツタサウナ

一明治三十五年

(仰臥漫錄)

### 鳥井峠の茶菓

○苗代茶菓を食ひし事 同し信州の旅行の時に道傍の家に苗代茶菓が眞赤になつてをるのを見て余はほしくて堪らなくなつた。駄菓子屋などを覗いて見ても茶菓を賣つてゐる處はない。道

で遊んでゐる小さな兒が茶菓を食ひ乍ら余の方を不思議さうに見てをるなども時々あつた。木曾路へ這入つて鰐川迄來た。爰は木曾第一の難處と聞えたる鳥井峠の麓で名物蕨餅を賣つてをる處である。余はその大きな茶店に休んだ。茶店の女主人と見えるのは年頃卅許りで勿論眉を剃つてをるがしんから色の白い女であつた。此店の前に馬が一匹繋いであつた、余は女主人に向いて鳥井峠へ上るのであるが馬はなからうかと尋ねると、丁度其店に休んでゐた馬が歸り馬であるといふ事であつた。其馬士といふのはまだ十三四の子供であつたが、余はこれと談判して鳥井峠頂上迄の駄賃を十錢と極めた。此登路の難儀を十錢で免れたかと思ふと、余は嬉しくて堪らなかつた。併しそこらにゐた男共が其若い馬士をからかふ所を聞くと、お前は十錢のたゞまうけをしたといふ様にいふて、駄賃が高過ぎるといふ事を暗に諷してゐたらしかつた。それから女主人は余に向ひて蕨餅を食ふかと尋ねるから、余は蕨餅は食はぬが茶菓は無いかと尋ねた。さうすると、其茶菓といふのがわからぬので、女主人は其處らに居る男共に相談して見たが、誰にもわからなかつた。余は再び手眞似を交せて解剖的の説明を試みた所が、女主人は突然と、あゝサンゴミか、といふた。それならば内の裏にもあるから行つて見ろといふので、

余は臺所の様な所を通り抜けて裏迄出て見ると、一間許りの苗代茶莢が累々としてなつてをつた。これをくれるかといへば、幾らでも取れといふ。余が取りつつある傍へ一人の男が来て取つてくれる、女主人はわざ／＼出て来て何か指圖をしてゐる。ハンケチに一杯ほど取りためたので、余はきりあげて店へ歸つて来た。此代はいくらやらうかといふと、代はいりませぬといふ。しかたがないから、少し許りの茶代を置いて余は馬の背に跨つた。女主人など丁寧に余を見送つた。菅笠を被つてゐても木曾路では斯ういふ風に歡待せられるのである。馬はヒヨクリ／＼と鳥井峠を上つて行く。おとなしさうなので安心はしてゐたが、時に絶壁に臨んだ時には若しや狭い路を踏み外しはしまいかと膽を冷やさぬでもなかつた。余はハンケチの中から茶莢を出しながらポツリ／＼と食ふてゐる。見下せば千仞の絶壁鳥の音も聞えず、足下に連なる山又山南濃州に向て走る、とでもいひさうな此壯快な景色の中を、馬一匹ヒヨクリ／＼と歩んでゐる、余は馬上に在つて口を紫にしてゐるなどは、實に愉快でたまらなかつた。茶莢はとう／＼盡きてしまつた、ハンケチは眞赤に染んでゐる、もう鳥井峠の頂上は遠くはないやうである。

—明治三十四年三月、四月—

(くだもの)

## 和歌といふもの

—歌よみに與ふる書二つ—

### 歌よみに與ふる書

仰の如く近來和歌は一向に振ひ不申候。正直に申し候へば萬葉以來實朝以來一向に振ひ不申候。實朝といふ人は三十にも足らで、いざ是からといふ處にてあへなき最後を遂げられ誠に残念致候。あの人をして今十年も活かして置いたならどんなに名歌を澤山残したかも知れ不申候。兎に角に第一流の歌人と存候。強ち人丸赤人の餘唾を舐るでも無く固より貫之定家の糟粕をしやぶるでも無く自己の本領屹然として山嶽と高きを争ひ日月と光を競ふ處實に畏るべく尊むべく覺えず膝を屈するの思ひ有之候。古來凡庸の人と評し來りしは必ず誤なるべく北條氏を憚

りて韜晦せし人かさらずば大器晩成の人なりしかと覺え候。人の上に立つ人にて文學技藝に達したらん者は人間としては下等の地に居るが通例なれども實朝は全く例外の人に相違無之候。何故と申すに實朝の歌は只器用といふのでは無く力量あり見識あり威勢あり時流に染ます世間に媚びざる處例の物數奇連中や死に歌よみの公卿達と迎も同日には論じ難く人間として立派な見識のある人間ならでは實朝の歌の如き力ある歌は詠みいでられまじく候。實朝は力を極めて實朝をほめた人なれども眞淵のほめ方はまだ足らぬやうに存候。眞淵は實朝の歌の妙味の半面を知りて他の半面を知らざりし故に可有之候。

眞淵は歌に就きては近世の達見家にて萬葉崇拜のところ抔當時に在りて實にえらいものに有之候へども生等の眼より見れば猶萬葉をも褒め足らぬ心地致候。眞淵が萬葉にも善き調あり惡き調ありといふことをいたく氣にして繰り返し申し候は世人が萬葉中の信屈なる歌を取りて「これだから萬葉はだめだ」など、攻撃するを恐れたるかと思見申候。固より眞淵自身もそれらを善き歌とは思はざりし故に弱みもいで候ひけん。併しながら世人が信屈と申す萬葉の歌や眞淵が惡き調と申す萬葉の歌の中には生の最も好む歌も有之と存ぜられ候。それを如何にとい

ふに他の人は言ふまでも無く眞淵の歌にも生が好む所の萬葉調といふ者は一向に見當り不申候。(尤も此邊の論は短歌に就きての論と御承知可被下候)眞淵の家集を見て眞淵は存外に萬葉の分らぬ人と呆れ申候。斯く申し候とて全く眞淵をけなす譯にては無之候。楯取魚彦は萬葉を模したる歌を多く詠みいでたれど猶これと思ふ者は極めて少く候。左程に古調は擬し難きにやと疑ひ居候處近來生等の相知れる人の中に歌よみにはあらで却て古調を巧に模する人少からぬことを知り申候。是に由りて觀れば昔の歌よみの歌は今の歌よみならぬ人の歌よりも遙に劣り候やらんと心細く相成申候。さて今の歌よみの歌は昔の歌よみの歌よりも更に劣り候はんには如何申すべき。

長歌のみは稍々短歌と異なり申候。古今集の長歌などは箸にも棒にもかゝらず候へども箇様な長歌は古今集時代にも後世にも餘り流行らざりしこそもつけの幸と存ぜられ候なれ。されば後世にても長歌を詠む者には直に萬葉を師とする者多く従つて可なりの作を見受け申候。今日とても長歌を好んで作る者は短歌に比すれば多少手際善く出來申候。(御歌會派の氣まぐれに作る長歌などは端唄に劣り申候)併し或る人は難じて長歌が萬葉の模型を離るゝ能はざるを笑ひ

申候。それも尤には候へども歌よみにそんなむづかしい事を注文致し候はゞ古今以後殆ど新しい歌が無いと申さねば相成間敷候。猶いろ／＼申し残したる事は後鴻に譲り申候。不具。

一明治三十一年二月十二日

(歌よみに與ふる書)

### 三たび

#### 歌よみに與ふる書

前略。歌よみの如く馬鹿な、のんきなものは、またと無之候。歌よみのいふ事を聞き候へば和歌程善き者は他に無き由いつでも誇り申候へども歌よみは歌より外の者は何も知らぬ故に歌が一番善きやうに自惚候次第に有之候。彼等は歌に最も近き俳句すら少しも解せず十七字でさへあれば川柳も俳句も同じと思ふ程の、のんきさ加減なれば、況して支那の詩を研究するでも無く西洋には詩といふものが有るやらそれも分らぬ文盲淺學、況して小説や院本も和歌と同じく文學といふ者に屬すと聞かば定めて目を剝いて驚き可申候。斯く申さば譏謗罵詈雑言を知らぬしれ者と思ふ人もあるべけれど實際なれば致方無之候。若し生の言が誤れりと思さば所謂歌よ

みの中より只一人にても俳句を解する人を御指名可被下候。生は歌よみに向ひて何の恨も持たぬに斯く罵詈雑言がましき言を放たねばならぬやうに相成候心の程御察被下度候。

歌を一番善いと申すは固より理窟も無き事にて一番善い譯は毫も無之候。俳句には俳句の長所あり、支那の詩には支那の詩の長所あり、西洋の詩には西洋の詩の長所あり、戲曲院本には戲曲院本の長所あり其長所は固より和歌の及ぶ所にあらず候。理窟は別とした處で一體歌よみは和歌を一番善い者と考へた上でどうする積りにや、歌が一番善い者ならばどうでもかうでも上手でも下手でも三十一文字並べさへすりや天下第一の者であつて秀逸と稱せらるゝ俳句にも漢詩にも洋詩にも優りたる者と思ひ候者にや其量見が聞きたく候。最も下手な歌も最も善き俳句漢詩等に優り候程ならば誰も俳句漢詩等に骨折る馬鹿はあるまじく候。若し又俳句漢詩等にも和歌より善き者あり和歌にも俳句漢詩等より悪き者ありといふならば和歌ばかりが一番善きにてもあるまじく候。歌よみの淺見には今更のやうに呆れ申候。

俳句には調が無くて和歌には調がある、故に和歌は俳句に勝れりとある人は申し候。これは強ち一人の論では無く歌よみ仲間には箇様な説を抱く者多き事と存候。歌よみどもはいたく調と

いふ事を誤解致居候。調にはなだらかなる調も有之、迫りたる調も有之候。平和な長閑な様を歌ふにはなだらかなる長き調を用ふべく悲哀とか慷慨とかにて情の迫りたる時又は天然にても人事にても景象の活動甚だしく變化の急なる時之を歌ふには迫りたる短き調を用ふべきは論ずる迄も無く候。然るに歌よみは調は總てなだらかなる者とのみ心得候と相見え申候。斯る誤を來すも畢竟從來の和歌がなだらかなる調子のみを取り來りしに因る者にて、俳句も漢詩も見ず歌集ばかりを讀みたる歌よみには爾か思はるゝも無理ならぬ事と存候。さてく困つた者に御座候。なだらかなる調が和歌の長所ならば迫りたる調が俳句の長所なる事は分り申さざるやらん。併し迫りたる調強き調などいふ調の味は所謂歌よみには到底分り申す間敷か。眞淵は雄々しく強き歌を好み候へどもさて其歌を見ると存外に雄々しく強き者は少く、實朝の歌の雄々しく強きが如きは眞淵には一首も見あたらす候。「飛ぶ鶯の翼もたわに」などいへるは眞淵集中の佳什にて強き方の歌なれども意味ばかり強くて調子は弱く感ぜられ候。實朝をして此意匠を詠ましめば箇様な調子には詠むまじく候。「ものものふの矢なみつくるふ」の歌の如き鶯を吹き飛ばすほどの荒々しき趣向ならぬと調子の強き事は並ぶ者無く此歌を誦すれば鶯の音を聞くが如き

心地致候。眞淵評に然りとせば眞淵以下の歌よみは申す迄も無く候。斯る歌よみに蕪村派の俳句集か盛唐の詩集か讀ませたく存候へども、驕りきつたる歌よみどもは宗旨以外の書を読むことは承知致すまじく勸めるだけが野暮にや候べき。

御承知の如く生は歌よみよりは局外者とか素人とかいはるゝ身に有之従つて詳しき歌の學問は致さず格が何だか文法が何だか少しも承知致さず候へども大體の趣味如何に於ては自ら信ずる所あり此點に就きて却て専門の歌よみが不注意を責むる者に御座候。箇様に悪口をつき申さば生を彌次馬連と同様に見る人もあるべけれど生の彌次馬連なるか否かは貴兄は御承知の事と存候。異論の人あらば何人にでも來訪あるやう貴兄より御傳へ被下度三日三夜なりともつゞけさまに議論可致候。熱心の點に於ては決して普通の歌よみどもには負け不申候。情激し筆走り候まゝ失禮の語も多かるべく御海容可被下候。拜具。



竹の里歌 (拔萃)

—和歌—

牛嶋神社のまつりの日よめる

みやしろになる鈴の音にあけて行く日はうららかや春ならねとも  
秩父てふ峰より出つる墨田川かきりしられぬ戀もするかな

(明治二十一年)

「春の野遊び」のうち

春風の吹かぬくまなし野の道は名もなき草に花そさきける

(明治二十三年)

「かけはしの詠」のうち

むらきえし山の白雪きてみれば駒のあかきにゆらく卯の花

(明治二十四年)

高濱虚子へ(一月二十五日)

うちむれて若菜つむなるをとめ子がかたみの底に浅き春かも

(明治二十五年)

すむ人のありとしられて山の上に朝霧ふかく残るともし火

(明治二十六年)

米洗ふ賤が門邊のいさゝ川瘦せてぞ咲ける花かきつばた

(明治二十七年)

有明の二十日の月のはらくとしくれて消ゆる杉のむら立

(明治二十八年)

柿の實のあまきもありぬ柿の實の澁きもありぬ澁きぞうまき

おろかちふ庵のあるじのあれにたびし柿のうまさの忘らえなくに

(明治三十年)

金州城外所見 一首

ものゝふの屍をさむる人も無し堇花咲く春の山陰

金州戦後 一首

人住まぬいくさのあとの崩れ家杏の花は咲きて散りけり  
日にうとき庭の垣根の霜柱水仙に添ひて炭俵敷く  
麥種うる小嶋を近みたまゝに雲雀鳴くなり帆檣の上に  
驛路の桃の花散る春雨にからかささして旅人の行く  
いくさ過ぎて人無き村を来て見れば鶺鴒すくふ道の邊の木に  
鉢一つ紫濃きはをだまきか赤きは花の名を忘れけり  
國人とつ國人と打ちきそふベースポールを見ればゆゝしも  
夏桑の畑に雪ふり度會の五十鈴の宮に火は飛びまよふ

おそはれし宵寐の夢の驚けば薬まゐれとみとり女のいふ  
うたゝ寝のうたゝ苦しき夢さめて汗ふき居れば薔薇の花散る  
釣垂れて魚餌につかず蜻蛉のとまりては飛ぶ河骨の花  
山も見えず鳥もかけらず五百日行く八重の汐路の船の中の蠅  
富士を踏みて歸りし人の物語聞きつつ細き足さするわれは  
生ける者命を惜み死にすればまたかへり來ず孫一人あり

(明治三十一年)

虚子に贈る

岩ばしる水のながれのたゞ中に湯玉わきたついで湯くすしも  
武蔵野に秋風吹けば故郷の新居の郡の芋をしぞ思ふ  
見なれにし蔓こぼせば大佛は空の眞中にあらはれにけり  
鏡なすガラス張窓影透きて上野の森に雪つもる見ゆ

(明治三十二年)

いたつきの床邊の瓶に梅いけて疊に散りし花も掃はず  
霜おほひのわら取りすつる芍薬の刈の紅に春の雨ふる  
汽車の音の走りすぎたる垣の外の萌ゆる木末に煙うづまく  
八汐路の海をへだてゝつらなれる紀伊の國山曇りてくれぬ

(明治三十三年)

瓶にさす藤の花ぶさ花垂れて病の牀に春暮れんとす  
裏口の木戸のかたへの竹垣にたばねられたる山吹の花  
白妙のもちひを包むかしは葉の香をなつかしみくへど飽かぬかも

(明治三十四年)

かみふさの山の杉きりみやこべの茅場の町に茶室つくるも  
家の内に風は吹かねどことわりに争ひかねて梅の散るかも  
一たびもいまた見なくにわがためにすみれの花をつみし君かも  
赤羽根の汽車行く路のつくづくし又來む年も往きて摘まなむ

一、草花の盆栽一つは益より  
秋くさの七くさ八くさ、ひとはちに集めてうゑぬ、きちかうはま  
づさきいでつ、をみなへしいまだ

(明治三十五年)

新  
體  
詩

蜻  
蛉

ほがらかに照る 秋の日に  
赤き衣を 輝かせ  
蜻蛉群れ飛ぶ。其下に  
晴れて筑波の 山低し。  
頭を西に つらねつゝ  
共につい行き つい戻る  
穂なみ揃へし 田の上に

其影落ちて いそがはし。

—明治二十九年九月五日—

(小蟲)

### 金州城

わがすめらぎの春四月、  
金州城に来て見れば、  
いくさのあとの家荒れて、  
杏の花ぞさかりなる。

### 調 體

三崎の山を打ち越えて  
いくさの跡をとめくれば、  
此處も彼處も紫に

董咲く野のされかうべ。

### 空 村

鶺鴒さわぐ枯木立、  
夕日の光ひややかに  
山にかたよる一枝の  
寂寞として人もなし。

—明治二十九年十月二十日—

(金州雜詩)

### 償 金 收 容

償金五千餘萬兩  
清國拂ひ我受けぬ。  
外國人は之を見て

名譽とやせん。遼東の  
還附を恥づる心には  
しかく償金何かあらん。

君が代や黄金腐りて苔の花

### 三陸海嘯

太平洋の水湧きて  
奥の濱邊を洗ひ去る  
あはれは親も子も死んで  
屍も家も村も無し。  
人すがる屋根は浮巢のたぐひかな

### 皆既日蝕

天は秘密を掩はんとし  
人は秘密を知らんとす。  
夕靄多き北海を  
拂ふ科戸の風もなし。

ひやゝかや喰はれ残りの日の光

### 軍艦派遣

南の空を見てあれば  
怪しき雲こそ走りけれ。  
烟を立てゝいさましく  
マニラに向ふ吉野艦。  
折々は霞となつて風あらし

明治三十年一月二日

(明治二十九年)

## 古城の月

矢叫びの音 鬨の聲  
敵も味方も 屍なり  
十里の山河 血に染みて  
彼も一時と なりにけり

ふりにし跡を 来て見れば

石垣ばかり 残りなき

三百年の(修羅の巻の) 夢さめて

昔を照す 秋の月

——年次不詳——

## 文と繪と美と

### 流行小説家

○流行 小説家がはやるとして小説家が喜べば竊かに片隅に在りて眉を蹙むる者あり、而して眉を蹙むる者の中には眞成の小説家もあるべし。俳諧がはやるとして俳人が喜べば竊かに片隅に在りて眉に唾つける者あり、而して眉に唾つける者の中には眞成の俳人もあるべし。流行は一時の事にして世間の噂なり。美術文學は何處までも世間の外に立ち流行の上に居らざるべからず。流行に追はれ世間に媚ぶる文學者は是れ流行文學者なり。流行する時は五陵の年少争ふて纏頭を投じ、老大と成れば鞍馬稀にして門前雀羅を張るに至る。彼等の名譽は自己の一生を保つ能はず、況んや萬世をや。

—明治二十八年十二月—

(棒三昧)

## 古池の吟

「古池や蛙とびこむ水の音」とは誰も知りたる翁の句なるが、其意味を知る者は少し。余は六七年前にある人の話を聞きしに、こはふかみの三字を折句にせしものなり。併し其深意に至ては我々の親ふべきにあらず。恰も歌人の「ほのく」とに於けるが如し云々と。余此説を信じて中々分らぬものとして考へたることなかりき。然るに此春スペンサーフイロソフイー・スカーの文體論を讀みし時、minorinage を以て全體を現はす、即ち一部をあげて全體を現はし、あるはさみしくといはずして自らさみしき様に見せるのが最詩文の妙處なりといふに至て覺えず机をうつて「古池や」の句の味を知りたるを喜べり。悟りて後に考へて見れば、格別むづかしき意味でもなく、たゞ地の閑靜なる處を閑の字も靜もなくして現はしたるまでなり。心敬僧都の句に「散る花の音聞く程の深山かな」といふ句あり。同じ意味なれどもどちらが優れりや劣れりやは知らず。さりながら心敬の句には「程の」といふ字ありて芭蕉には此の如き字なし。これ或は芭蕉の方まさりたる所ならんか。併し趣向は心敬のも中々凡ならず。決して芭

蕉のに劣るべくも思はれず。いで生意氣にも理論的に改め見んと色々工夫したる末、「散る花の音を聞きたる深山哉」とせしに猶々をかしくて句にならず。はてなと思ひながら芭蕉の句を見るに聞くといふ字なし。さてはと悟りて見れば余の句は聞くといふ語を前のよりも長くせし故不都合なるなり。今度こそと思ひ直したれど、終りに「深山哉」と結ぶにはどうしても聞くといふ字を要する故、是非とも芭蕉流にかへざるべからずとて「奥山やはららと散る花の音」として見たれども、どうも古池程の風致なし。さりながらどこがわるいといふ理くつも見出だし得ず。謹んで大方の教を俟つ。

散ル花ニハ音ナク蛙ニハ音アリ、是レ兩句ノ差違アル所ナリ。即チ古池ノ句ノ方自然ナリ。(自註)

—明治二十二年— (筆まかせ 第一篇)

## 新しい假名文字

漢字廢止、羅馬字採用又は新字製造などの遼遠なる論は知らず。余は極めて手近なる必要に應ぜんために至急新假字の製造を望む者なり。其新假名に二種あり。一は拗音促音を一字



にて現はし得るやうなる者にして例せば茶の假名を「ちや」「チャ」などの如く二字に書かずして一字に書くやうにするなり。「しよ」「きよ」(虚)「くわ」(花)「しゆ」(朱)の如き類皆同じ。促音は普通「つ」の字を以て現はせどもこは假字を用わずして他の符號を用ゐるやうにしたしと思ふ。併し「しゆ」「ちゆ」等の拗音の韻文上一音なると違ひ促音は二音なれば其の符號をして矢張一字分の面積を與ふるも可ならん。

他の一種は外國語にある音にして我邦に無き者を書きあらはし得る新字なり。

此等の新字を作るは極めて容易の事にして殆ど考案を費さずして出來得べしと信ず。試にいはんか朱の假字は「し」と「ユ」又は「ゆ」の二字を結びつけたる如き者を少し變化して用ゐ、著の假字は「ち」と「ヨ」又は「よ」の二字を結びつけたるを少し變化して用ゐるが如く此例を以て他の字をも作らば名は新字といへど其實舊字の變化に過ぎずして新に新字を學ぶの必要もなく極めて便利なるべしと信ず。又外國音の方は外國の原字を其儘用ゐるか又は多少變化して之を用ゐ、五母音の變化を示すためには迷記法の符號を用ゐるか又は拗音の場合に言ひし如く假字をくつゝけても可なるべし。とにかくに仕事は簡單にして容易なり。

且つ新假字増補の主意は、強制的に行はぬ以上は誰一人反對する者なかるべし。余は二三十人の學者たちが集りて試に新假字を作り之を世に公にせられん事を望むなり。(十一日)

一 明治三十四年三月一

(墨汁一滴)

### 微妙複雑なる人事

天然は簡單なり。人事は複雑なり。天然は沈黙し人事は活動す。簡單なる者に就きて美を求むるは易く、複雑なる者は難し。沈黙せる者を寫すは易く、活動せる者は難し。人間の思想、感情の單一なる古代にありて比較的善く天然を寫し得たるは易きより入りたる者なるべし。俳句の初より天然美を發揮したるも偶然にあらず。然れども複雑なる者も活動せる者も少しく之を研究せんか、之を描くこと強ち難きにあらず。只、俳句十七字の小天地に今迄は辛うじて一山一水一草一木を寫し出だしゝものを、同じ區劃の内に變化極りなく活動止まざる人世の一部分なりとも縮寫せんとするは難中の難に屬す。俳句に人事的美を詠じたる者少き所以なり。芭蕉、去來は寧ろ天然に重きを置き、其角、嵐雪は人事を寫さんとして端無

く佶屈整牙に陥り、或は人をして之を解するに苦しましむるに至る。此の如く人は皆之を難しとする所に向つて、獨り蕪村は何の苦もなく進み思ふまゝに濶歩横行せり。今人は之を見て却て其容易なるを認めしならん。しかも蕪村以後に於てすら之を學びし者を見ず。

芭蕉の句は人事を詠みたる者多かれど、皆自己の境涯を寫したるに止まり

鞍壺に小坊主のるや大根引

の如く自己以外に在りて半ば人事美を加へたるすら極めて少し。

蕪村の句は

行く春や選者を恨む歌の主

命婦より牡丹餅たはす彼岸かな

短夜や同心衆の川手水

少年の矢數問ひよる念者ぶり

水の粉やあるじかしこき後家の君

蟲干や甥の僧訪ふ東大寺

祇園會や僧の訪ひよる梶がもと  
味噌汁をくはぬ娘の夏書かな  
鮓つけてやがて去にたる魚屋かな  
禪に團扇さしたる亭主かな  
青梅に眉あつめたる美人かな  
旅芝居穂麥がもとの鏡立て  
身に入むや亡妻の櫛を鬮に踏む  
門前の老婆子薪食る野分かな  
栗そなふ恵心の作の彌陀佛  
書記典主故園に遊ぶ冬至かな  
沙彌律師ころりくと衾かな  
さゝめこと頭巾にかつく羽折かな  
孝行な子供等に蒲團一つづゝ

の如き數へ盡さず、此等の什<sup>じよ</sup>必ずしも力を用ひし者に非ずと雖も、皆善く蕪村の特色を現して一句だに他人の作とまがふべくもあらず。天稟とは言ひながら老熟の致す所ならん。

天然美に空間的の者多きは殊に俳句に於て然り。蓋し俳句は短くして時間を容るゝ能はざるなり。故に人事を詠ぜんとする場合にも、猶人事の特色とすべき時間を寫さずして空間を寫すは俳句の性質の然らしむるに因る。たま／＼時間を寫す者ありとも、それは現在と一様な事情の過去又は未來に繼續するに過ぎず。こゝに例外とすべき蕪村の句二首あり。

御手討の夫婦なりしを更衣<sup>こゑもがへ</sup>

打ちはたす梵論<sup>ぼんろん</sup>つれだちて夏野かな

前者は過去のある人事を敘し、後者は未來のある人事を敘す。一句の主眼が一は過去の人事に在り、一は未來の人事に在るは二句同一なり、其主眼なる人事が人事中の複雑なる者なる事も二句同一なり。此の如き者は古往今來他に其例を見ず。

—明治三十年四月十三日—十一月二十九日—

(俳人蕪村)

### 「近古名流手蹟」

「近古名流手蹟」を見ると昔の人は皆むつかしい手紙を書いたもので今の人には甚だ讀みにくい、これは時代の變遷で自ら斯うなつたのであらう。今の人の手紙でも二三百年後に近古名流手蹟となつて出た時には其時の人はむづかしがつて得讀まぬかも知れぬ。それから最上一時代後の事を想像して明治百年頃の名家の手紙が近古名流手蹟となつて出たらどんな者であらうか。其手紙といふ者は恐らくは片假名羅馬字などのこた／＼と混雜した者で迎<sup>むか</sup>も今日の我々には讀めぬやうな書きやうであらうと思はれる。(二十六日)

—明治三十四年五月—

(墨汁一滴)

### 造化の妙

○草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に寫生してゐると、造化の秘密が段々分つて來るやうな氣がする。(七日)

—明治三十五年八月—

(病牀六尺)

## 外國の山水畫

○西洋の古畫の寫眞を見て居たらば、二百年前位に和蘭人の書いた風景畫である。是等は恐らくは此時代に在つては珍しい材料であつたのであらう。日本では人物畫こそ珍しけれ、風景畫は極めて普通であるが、併しそれも上古から風景畫があつたわけではない。巨勢金岡時代はいふまでもなく、それより後土佐畫の起つた頃までも人間とか佛とかいふものを主として居つたのであるが、支那から禪僧などが來て佛敎上に互に交通が始まつてから、支那の山水畫なる者が輸入されて、それから日本にも山水畫が流行したのである。

日本では山水畫といふ名が示して居る如く、多くは山や水の大きな景色が畫いてある。けれども西洋の方はそんなに馬鹿に廣い景色を畫かぬから、大木を主として畫いた風景畫が多い。それだから水を畫いても川の一部分とか海の一部とかを寫す位な事で、山水畫といふ名をあてはめることは出來ぬ。

西洋の風景畫を見るのに、昔のは木を畫けば大木の嚴めしいところが極めて綿密に寫されて居る。それが近頃の風景畫になると、木を畫いても必ずしも大木の嚴めしいところを畫かないで、普通の木の若々しく柔かな趣味を輕快に寫したのが多いやうに見える。堅い趣味から柔かい趣味に移り嚴格な趣味から輕快なる趣味に移つて行くのは今日の世界の趨勢であつて、必ずしも畫の上ばかりでは無く、又必ずしも西洋ばかりに限つた事でも無い様である。嘗て文學の美を論ずる時に、敘事、敘情、敘景の三種に別つて論じた事があつた。それを或人は攻撃して、西洋には敘事、敘情といふ事はあるが敘景といふ事は無いといふたので、余は西洋の眞似をしたのではないといふて其時に笑ふた事であつた。西洋には昔から風景畫も風景詩も少いので學者が審美的の議論をしても風景の上には一切説き及ぼさないのであるさうな。これは西洋人の見聞の狭いのに基いて居るのであるから先づ彼等の落度といはねばならぬ。(八日)

—明治三十五年五月—

(病牀六尺)

## 畫讀について

○畫讀といふ事は支那に始つて、日本に傳はつた事と思はれるが、恐らくは支那でも近世に

起つたことであらう。日本でも支那畫をまねた者には、畫讀即ち詩を書いた者があるが、多くは贅物と思はれる。山水などの完全したる畫には何も文字などは書かぬ方が善いので、完全した上に更に蛇足の畫讀を添へるのが心得ぬ事である。併し人の肖像などを畫きたる者には讀があるのが面白い場合がある。それは人物獨りでは畫として不完全に考へられることもあるので畫讀を以て其不足を補ふのである。所謂俳畫などといふ粗畫に俳句の讀を書くのは、山水などの場合と違ふて、面白き者が多い。粗畫にても趣向の完全したる者には、畫讀は蛇足であるが畫だけでは何だか物足らぬといふやうな場合に俳句の讀を書いて其趣味の不足を補ふ事は悪い事ではない。それ故に或畫に讀をする時には其讀と其畫と重複しては面白くない。例へば狐が公達に化けて居る畫が畫いてある上に

公達に狐化けたり宵の春

と讀したのでは、畫も讀も同じ事になるので、少しも讀をしただけの妙はない。祇園の夜櫻といふやうな景色を畫いた粗畫の上に、前にいふた「公達に狐化けたり」の句を讀として書くなれば夫れは面白いであらう。蛙が柳に飛びつかうとして誤つて落ちた處を畫いた畫に、

也有は

見つけたりかはづに臍のなき事を

といふ讀をした。是は蛙といふ事は重複して居るけれども、臍のないと特に主觀的にいふた處は、この畫を見たばかりでは、思ひ付くべき事ではない。一種の滑稽的趣向を作者が考へ出したのであるから、是れは讀として差支がない。只葵の花ばかり畫いた上へ普通の葵の句を畫讀として書いた處で重複といふ譯でもあるまいが、併しかういふ場合には葵の句を書かず、同じ趣の他の句を書くのも面白いであらう。それは葵の花の咲いて居りさうな場所をあらはした句とか、又は葵の花の咲いて居る時候をあらはした句とか、又は葵の花より聯想の起るべき他の句とか、さういふものを畫讀として書くのである。も一つ例を擧げていふならば團扇の畫に螢の句を書くとか、螢の畫に團扇の句を書くとか、もし又團扇と螢と共に畫いてある畫ならば、涼しさやとか夕涼みとかいふやうな句を讀する。要するに畫ばかりでも不完全、句ばかりでも不完全といふ場合に畫と句を併せて、始めて完全するやうにするのが畫讀の本意である。歌を畫讀にする場合も俳句と違ふた事はない。(八日)

明治三十五年七月

(病牀六尺)

### 畫の品性

○西洋の裸體畫を見るに其品格の高下を分つべし。十字架上の基督キリストを描くが如き彩雲堆裡の天神を寫すが如き其上なる者なり。俗男俗女兩性を竝べ寫すは其下なる者なり。女子佇立すれば、男子物の陰暗き處より、又窓高き處より、又は破れたる空間より之を窺ひ見る狀を描く、是れ下の下なる者春畫と擇ぶ無し。寧ろ春畫よりも野卑なり。其最も野卑なる者を以て少年を釣らんとする書肆の心底こそあさましけれ。——明治三十年十二月——  
(墨のあまり)

### 俳畫の眞髓

○略畫俳畫などと言つて筆數の少ない畫を畫くのは、寧ろ日本畫の長所といふてもよい位であるが、其略畫といふのは複雑した畫を簡單に畫いて見せるのを本領ほんりやうと思ふて居る人が多い。併しそれには限らぬ。極めて簡單なるものの簡單なる趣味を發揮するのも固より略畫の

長所である。公長略畫といふ本を見ると、非常に簡單なる趣向を以て、手輕い心持のよい趣味をあらはしてゐるのが多い。例へば三四寸角の中へ稻の苗でもあらうかと言ふやうな青い草を大きく一ぱいに畫いて、其中に蛙が一匹坐つて居る、何でもないうであるが、青い色の中に黒い蛙が一匹、何となくよい感じがする。或ひは水を唯と青く塗つて其中へ蛙が今飛び込んだといふ處が畫いてある、蛙の足は三本だけ明瞭に見えるが一本の足と頭の所は見えて居らん、これも平凡な趣向であるけれど、青い水と黒い蛙とばかりを畫いた所は矢張前の畫と同じやうに極めて小さい心持のよい趣味に富んで居る。其外、蓮の葉を一枚縁に畫いて、傍らかたはらに仰いで居る鷺と俯うつむいて居る鷺と二ツ畫いてあるが如きは、複雑なものを簡單にあらはした手段がうまいのであるが、簡單に畫いた爲に、色の配合、線の配合など直接に見えて、密畫よりは却て其趣味がよくあらはれて居る。其の外此本にある畫は今迄見た畫の中の、最簡單なる畫であつて、而も其の簡單な内に一々趣味を含んでゐる處は蓋し一種の伎倆と言はねばならぬ。(二十五日)

明治三十五年八月

(病牀六尺)

## 寫生の味

○寫生といふ事は、畫を畫くにも、記事文を書く上にも極めて必要なもので、此の手段によらなくては畫も記事文も全く出来ないといふてもよい位である。これは早くより西洋では、用ゐられて居つた手段であるが、併し昔の寫生は不完全な寫生であつた爲に、此頃は更に進歩して一層精密な手段を取るやうになつて居る。然るに日本では昔から寫生といふ事を甚だおろそかに見て居つた爲に、畫の發達を妨げ、又文章も歌も總ての事が皆進歩しなかつたのである。それが習慣となつて今日でもまだ寫生の味を知らない人が十中の八九である。畫の上にも詩歌の上にも、理想といふ事を稱へる人が少くないが、それらは寫生の味を知らない人であつて、寫生といふことを非常に淺薄な事として排斥するのであるが、その實、理想の方が餘程淺薄であつて、とても寫生の趣味の變化多きには及ばぬ事である。理想の作が必ず悪いといふわけではないが、普通に理想として顯れる作には、悪いのが多いといふのが事實である。理想といふ事は人間の考を表すのであるから、其の人間が非常な奇才でない以上

は、到底類似と陳腐を免れぬやうになるのは必然である。固より子供に見せる時、無學なる人に見せる時、初心なる人に見せる時などには、理想といふ事が其人を感じしめる事が無い事はないが、略々學問あり見識ある以上の人に見せる時には非常なる偉人の變つた理想でなければ、到底其の人を満足せしめる事は出来ないであらう。是れは今日以後の如く教育の普及した時世には免れない事である。之に反して寫生といふ事は、天然を寫すのであるから、天然の趣味が變化して居るだけ其れだけ、寫生文寫生畫の趣味も變化し得るのである。寫生の作を見ると、一寸淺薄のやうに見えても、深く味へば味はふ程變化が多く趣味が深い。寫生の弊害を言へば、勿論いろ／＼の弊害もあるであらうけれど、今日實際に當てはめて見ても、理想の弊害ほど甚しくないやうに思ふ。理想といふやつは一呼吸に屋根の上に飛び上らうとして却て池の中に落ち込むやうな事が多い。寫生は平淡である代りに、さる仕損ひは無いのである。さうして平淡の中に至味を寓するものに至つては、其妙實に言ふ可からざるものがある。

### 美に標準ありや

○美の標準　は各自の感情によりて異なり。併し其標準は各自の標準と思へる者にして絶対的の標準にあらざること勿論なり。此外に絶対的の標準有りや否やは知るべからず、縦し有り<sup>と</sup>知るとも其標準の性質如何は終に知るべからざるなり。若し美の標準にして議會の決議の如く多數を以て定むべきものならば美の標準は裏店の賤の男賤の女が喜ぶべき極めて卑俗なるものとなるべし。されば多數にて定むべからざるは是れ亦論を俟たず。故に美の標準は各自により異なりといふこそ最も確實なる説なれ。それを生物<sup>なまもの</sup>じりが美には一定の標準ありなどといへばこけ威しの爲に尤もらしく聞ゆるとして標準あるらしく言ひ己れもあるらしく覺ゆる愚かさよ。此標準説程空漠なる説はよもあるまじ。但し西洋崇拜者は何でも彼でも標準ありといふが確定なりと何處迄も信ぜざるべからざるものにや。――明治二十八年十二月――(棒三昧)

### 西洋ずきの愚

○西洋　西洋がいかにかに有り難きものにや、西洋を知らぬ我等には少し分りかねたれども、何でも彼でも西洋といへば有り難がる輩の氣の知れぬ事よ。ある人は文學を「韻文」「散文」の二つに分ち某の文は韻文にもあらず散文にもあらず故に文學にあらずとて之を打ち捨てしことあり。今の西洋好の人の論は皆此類のみ。事物の種類は見やうによりて幾種にも幾様にも分ち得べし。毛唐人が二つに分けたればとて二つに分けねばならぬ道理も無く、西洋になき種類のものなりとて文學にならぬ道理もあるまじ。哲學の原則は西洋人の糟粕でなければ哲學にあらずと思ふ人あり、いとをこの沙汰なれども其癡猶恕すべき所あり。我國在來の文學をも新作の文學をも押しつぶしてこは西洋の文學に似よりもなしなどといひつゝ其の言葉に輕蔑の意味を帯ばせて鼻うごめかす人のおるかさよ、其愚終に教ふべからざるなり。

(棒三昧)

### 色彩を作る

○或繪具と或繪具とを合せて草花を畫く、それでもまだ思ふやうな色が出ないと又他の繪具



をなすつてみる。同じ赤い色でも少しづつゝの色の違ひで趣が違つて来る。いろ／＼に工夫して少しくすんだ赤とか、少し黄色味を帯びた赤とかいふものを出すのが寫生の一つの楽しみである。神様が草花を染める時も矢張こんな工夫して楽しんで居るのであらうか。(九日)

—明治三十五年八月—

(病牀六尺)

### くだもの色

○くだもの色　くだものには大概美しい皮がかぶさつてをる。覆盆子桑の實などは稍々違ふ。其皮の色は多くは始め青い色であつて、熟する程黄色か又は赤色になる。中には紫色になるものもある。(西瓜の皮は始めから終り迄青い)普通のくだものゝ皮は赤なら赤黄なら黄と一色であるが、林檎に至つては一個の菓物の内に濃紅や淡紅や樺や黄や緑や種種な色があつて、色彩の美を極めて居る。其皮をむいて見ると、肉の色は又違ふて来る。柑類は皮の色も肉の色も殆ど同一であるが、柿は肉の色がすこし薄い。葡萄の如きは肉の紫色は皮の紫色よりも遙に薄い。或は肉の緑なものもある。林檎に至つては美しい皮一枚の下は眞白の肉の色である。併し白い肉にも少しは區別があつて、稍々黄を帯びてゐるのは甘味が多うて、青味を帯びてゐるのは酸味が多い。

—明治三十四年三月—

(くだもの)

### 廣重の俗氣

○立齋廣重は浮世畫家中の大家である。其の景色畫は誰も外の者の知らぬ處をつかまへて居る。殊に名所の景色を畫くには第一に其實際の感じが現はれ、第二に其景色が多少面白く美術的の畫になつて居らねばならぬ。廣重は慥にこの二箇條に目をつけて且つ成功して居る。この點に於て已に彼が凡畫家でないことを證して居るが、尙其外に彼は遠近法を心得て居た。即ち近いものは大きく見えて、遠いものは小さく見えるといふことを知つて居た。これは誰でも知つて居るやうなことであるが、實際に畫の上に現はしたことが廣重の如く極端なるものは外にない。例へば淺草の觀音の門にある大提灯を非常に大きくかいて、本堂は向ふの方に小さくかいてある。目の前にある熊手の行列は非常に大きくかいてあつて、大鷲神社は遙かの向ふに小さくかいてある、鎧の渡しの渡し舟は非常に大きくかいてあつて、向ふの方に

蔵が小さくかいてある。といふやうな著しい遠近大小の現はしかたは、日本畫には殆どなかつたことである。廣重は或は西洋畫を見て發明したのでもあらうか。兎に角彼は儘に尊ぶべき畫才を持ちながら、全く浮世繪を脱してしまふことが出来なかつたのは甚だ遺憾である。浮世繪を脱しないといふことは其筆に俗氣の存して居るのをいふのである。(三十一日)

(病牀六尺)

### 「感じの善い」にと就て

「感じの善い」といふ語は西洋派の畫師に教へられたので、元は畫師が畫又は天然の景色に就ていふ語である。單に面白いといふのとそんなに變りはないやうであるが、面白いといふ事は極めて廣い意味で、感じの善いといふ事は其一部分になつて居る。畫を見て面白いといふのは澤山あるが、感じの善いといふのは幾らも無い。畫又は景色を見た時に何となく俄に嬉しくて心持が善いといふやうなのがある。それを感じが善いといふのである。それであるから假令どんなに善い畫でも景色でも餘り莊重であるとか、餘り奇警であるとか、餘り雄壯

であるとか、餘り悲壯であるとか、餘り怪譎であるとか、餘り古雅であるとか、いふのは、感じの善いといふ部分には這入らぬ。感じの善いといふのは平和で、(多少の動搖はあつても平和を破らぬ程の動搖ならば善い)愉快で、一見して直に感ずるといふやうな者でなくてはならぬ。それは小説の上に就ていふても同じ事であるが、唯々畫や景色と違ふ所は小説では必ず人間が這入つて居る。併し人間ばかりで感じの善いといふ場合は殆どない。感じの善いといへば其人間を助くる所の周圍の景色が必ず添ふて居る。其上に其人物の所作即ち時間的な變化も幾らか含まれて居る。其人物の性格の連想せらるる場合も多い。更にいひ直せば小説中の感じの善いといふ場合は畫の如く一見して直に感に打たれるといふやうな客觀的の光景である事を要すると共に、其光景が其中の人物の所作によりて幾分かづつ時間的に變化して行くといふ事を許すのである。(但し其時間は餘り長きを許さぬ)

—明治三十三年九月—

(水滸傳と八犬傳—水滸傳の文章—)

### 和服と洋服の辯

「心の花」に大塚氏の日本服の美術的價值といふ演説筆記がある。この中に西洋の婦人服と日本の服人服とを比較して最後の斷案が

始終動いて居る優美の舉動や又動くにつれて現はれて來る變化無限の姿を見せると云ふ點で日本服はドウしても西洋服に勝つて居ります。

としてある。これは「運動を見せる」事の多いといふ理窟から推して日本服は西洋服よりも美なりと斷定せられたのであらうか。萬一さういふ次第ならばそれは不都合な論であると思ふ。いふまでもなく我々が物の美醜を判斷するのは理窟の上からでは無く、只只感情の上からである。如何に理窟づめに出來上つた者でも感情が美と承知せぬからは美とはいはれぬ。「運動を見せる」とかいふ事を假りに衣服の美の標準としたところで而して日本服が餘計に其美を現すやうに出來て居ると理窟の上で判斷せられたところで、さて感情の方でそれを美と感じなければ美といはれぬのは當然である。論者は果して感情の上で先づ美と感ぜられて而して後に此理窟を開析し出されたのであらうか。

論者若し感情の上から先づ日本女服の美を感ぜられたとならば余の感情は論者のと一致し

て居らぬといふ事を告白せねばならぬ。西洋日本兩様の婦人服を取つてどつちが善いかといはれても、それは一寸言ひかぬる事であるが、併し「運動を見せる」とかいふ理窟一點張で日本服を以て勝れりとするのは感服が出來ぬ、況して「運動を見せる」といふ事は一方よりいへば日本服にはピラピラした部分が多いといふ事で、さて其ピラピラした部分が多い日本服には「だらりとして取締の無い」といふ缺點があるのだ。そこへ行くと西洋服の方は善くしまりがついて居る。しまりがあるといふても所謂「運動を見せる」部分が無いといふのでは無い。胴で細く引きしめた反對に裾は思ひきつて廣げてある。日本服の全體がだらりとして居るのは趣が違ふ。

「運動を見せる」とかいふのも善いけれど、美な運動を見せてくれなければ困る。日本服には美な運動も見えるけれど醜な運動も見える。即ち運動する部分（袖とか裾とか）が自由に出來て居るだけは運動のために醜な形を現す場合が多いのも必然である。

純粹の美の上からいへばそんなものであるが。實際衣服は半以上必要に迫られて其制が自ら定まつた者であるから、それをいはず日本服と西洋服を比較するといふのは如何に理論

上とはいへ無理な話である、現に論者は運動といふけれど其運動といふ事は歩行とか舞蹈とかいふ事から出て来たのでそれは西洋人を主としての議論である。日本では中流以上の女は舞踏歩行は勿論、眞直に立つて居る場合すら少いのであるから「運動を見せる」といふ一點で日本服を論ずるのは斟酌をせねばならぬ所がある。日本の女は坐つて居るのが普通だから衣服も坐れるやうに造らねばならぬ。美の上からいへば日本服は立つても坐つても美なやうに造らねばならぬといふむづかしい條件がある。(西洋服は膝を折つて坐る必要は無い)西洋服は裾の部分に裝飾が多いに反して、日本服には袖の部分に裝飾が多いのは皆膝を折つて坐るといふ必要より出て来たのである。それだから立つた時の形を比較して西洋服をほめ日本服をおとすのは残酷である。(併し此論者のは日本服をほめるのだから別だ)(八日)

—明治三十四年六月—

(墨汁一滴)

## 俳味湧く

### 味つけの精神

料理人歸り去りし後に聞けば會席料理のたましひは味噌汁にある由、味噌汁の善惡にて其日の料理の優劣は定まるといへば我等の毎朝吸ふ味噌汁とは雲泥の差あることいふ迄もなし。味噌を選ぶは勿論、ダシに用ゐる鰹節は土佐節の上物三本位、それも善き部分だけを用ゐる、それ故味噌汁だけの價三圓以上にも上るといふ。(料理は總て五人前宛なれど汁は多く拵へて餘す例なれば一鍋の汁の價と見るべし)其汁の中へ、知らざる事とはいへ、山葵をまぜて啜りたるは餘りに心なきわざなりと料理人も呆れつらん。此話を聞きて今更に臍を噬む。